



子育て期の主婦の生活

新・冠婚葬祭入門・現代葬式考
ルポルタージュ・離婚のしかた教えます
特集座談会・東西転勤事情

156号

考える主婦の投稿誌



書きたいひと
考えたいひと
知りたいひと
怒りたいひと
「わいふ」は
あなたの雑誌です
あなたの中にあるものを
声にしてみませんか？
あなたは 発見するでしょう
同じことを
考えていたひとが
あそこにも ここにも
いたことを
そして
みんなで考えるとき
あなたは もう
一人ぼっちではない
ということ

投稿規定

予約購読者(会員)は、どなたでも投稿できます。投稿は原則としてすべて掲載します。

- (一) 随筆・随想・テーマ自由
千二百字まで。
- (二) わいふティーチン
特集テーマ原稿
千二百字まで。
- (三) おしゃべり、その他
五百字まで。
- (四) 持ち込み原稿は、形式、内容、長さ自由。ただし掲載は編集部で協議の上決定します。

「わいふ」は、会員の皆さまが創る雑誌です。しかし限られた紙面の都合上、多少選択することもありますのでご了承ください。

アンケートのまとめ・子育て期の主婦の生活

32

新・冠婚葬祭入門＊現代葬式考＊……………奥井登美子… 2

随筆……………末松悦子・小林和子・赤井久美子… 6
前田淳子・北川洋子・浅井俊子

〈わいふ〉と私……………会田智恵子…12

特集 座談会・東西転勤事情……………14

投稿……………原三枝子・白水光子・大友エミ子…22

うれしいはなし……………21

姑の世代から……………27

柏サークル誕生……………41

手探りの自立 主婦の手作り弁当屋さん……………28

ルポルタージュ 離婚のしかた教えます ①……………42

書評—女の子の育て方・女性解放の政治学—……………48

情報コーナー……………49

おしゃべり……………50

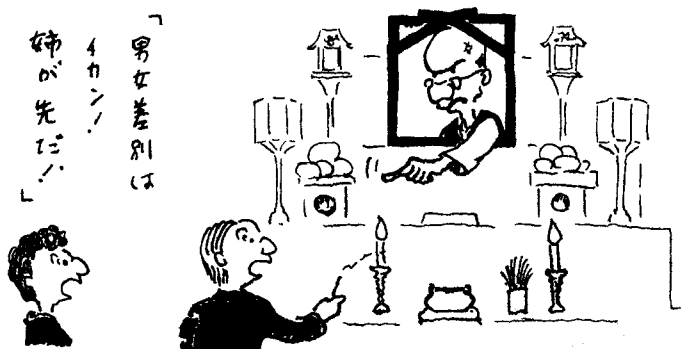
編集だより……………54

表紙・小山田チカエ

新・冠婚葬祭入門

現代葬式考

土浦市 奥井 登美子



男女平等というけれど、冠婚葬祭の中心は、しきたりに従う要素が多く男をたてることになりがちである。私はかねてから、小さな因習をたち切る試みを勇気をもって誰かがすべきであると考えていた。

昨夏、オヤジが死んだ。オヤジというのは、私の実の父のことである。

「独立自尊居士」私が高校生の時にオヤジにたてまつったアダ名である。若い頃の私はオヤジのいう「独立自尊」のトバッチリを受けて一人前に悩んでいた。女性の独立自尊は、まず結婚相手に依存しなくても生活できる経済力を身につけることだというオヤジに対して、私は精神と経済は別だ、とつっぱった。しかし私は薬剤師になり、妹は音楽の教師になっていた。

「さようなら」

オヤジは夜寝る時、さようならをいって寝た。

「なぜ? お休みなさいじゃないの?」

「いつ死んでもいいと思っている。だからいつも『さようなら』なんだ」

そんなことから、「死」ということに
ついて、いろいろなことを言っていた。

一、ひっそりとこの世からおさらばした
い。

二、他人にめいわくをかけるな。

三、戒名は親しみがなくていやだ、いら
ない。

大体こんなことだったと思う。その後の
オヤジは、オヤジ自身や私たちが考
えている以上に長生きし、昨夏、八十六才
の天寿を全うして亡くなった。最後の数
年間は老化し、ボケてしまつて、ただニ
コニコと可愛い人形みたいに何もいわ
なくなつてしまつたけど、元氣な頃、オヤ
ジの日常言っていたことを父の遺志と考
える点について誰も同じだった。

母と兄、私と妹と弟、五人で協議した
結果、オヤジの遺志を生かすことにした。
葬式の形に、亡くなった人の個性があ
つていいはずである。「オヤジはオヤジ
らしく、あの世に送つてやりたい」――

老父母は、子どもたちの誰とも決して
一緒に住もうとはしなかった。二人きり、
わずかな家賃収入だけをたよりにがん固

に“独立”を貫いた。「淋しいから会
いたい」とも言わなければ「経済的に困
るから少しは負担しろ」とも決して言わ
なかった。オヤジは昔、親孝行ほど下ら
ないものはないと常に言っていた。親孝行
するなといわれたわりに、いやそういわ
れたからこそ自主的に、みな、かなり親
孝行だったように思う。そんな子どもが
四人もいるのだから、世間なみの葬式を
出そうと思えば出すことは可能だ。しか
し、そんなことをしたら一番悲しむのは
当の本人のオヤジだろう。オヤジの悲し
む顔は見たくなかつた。

〔ひっそりとこの世からおさらばしたい〕

猛暑の中、通知をもらえば、無理して
も来てくれるだろう。それでは申しわけ
ないし、第一ひっそりということでは、誰
にもいわないで、子と孫連合の密葬とい
うことにした。誰にいわなくても子ども
が四人だと、夫婦で八人、孫が九人、父
は一人っ子だから兄弟はいけれど母の
弟達四人が、それぞれ夫婦で出席すると
それだけで二十六人。それに兄の義弟や
弟の義兄などごく親しい人が加わつて三
十五人。最後までお世話になつた女医さ

んと近所の人たちが参加して、約六十人
の会葬者になつてしまった。

〔めいわくをかけるな〕

時間的にも経済的にも負担をおかけし
ないということで『香典は故人の遺志に
より拝辞いたします』というポスターを
入口に貼つつけた。

「香典というのは、もらうより、こ
とわる方が時間がかかるんだよなあ」弟が
言った。「断固としてことわるべし!!」
みな一丸となつて貫こう!!」兄貴は武者
ぶるいよろしく机をドンとたたいた。

父は子どもを育てる時、男女の差、長
幼の序、すべて無視して育てた結果、兄
には長男であるとか、親の面倒をみると
いう自覚が全然ない。まるで二十才の若
者のように我侪で世間知らず、大学教授
の弟は哲学など専攻しているわりには、
よく世間を知つていて、兄貴をカバーし
た形になつてゐる。しかし、私は考えた
のである。

男女平等というけれど、冠婚葬祭の中
心は、しきたりに従う要素が多く男をた
てることになりがちである。私はかねて
から、小さな因習をたち切る試みを勇氣
をもつて誰かがすべきであると考えてい

た。非常識で世間知らずということとは裏をかえせば自由でこだわりのない精神のもち主ということになる。これはひとつ、兄貴をダシにして因習的なものを一切抜きにした男女平等の葬式が実施できるかも知れないと考えた。オヤジは我々を男だから女だからと差別することも、長男次男で差別することもしなかった。だから、男女平等葬が実現できたらそれはそれで一つの試みとしていいのではないかと思ったのである。

さて中学の音楽教師である妹の職場でも、弟のつとめ先の大学でも、うちの亭主の会社でも、慶弔規定みたいな内規があるらしく、通知を出せば休みがとれ、応分の香典が出るはず（弟の大学では学部長が葬式に出るしきたりとか）だといふけれど、そうなる職場にわかつてしまつて拾収がつかなくなるので、うちの亭主は他の理由で年次有給休暇をとつて一日休んだ。

〔戒名はいらない〕

ぼだい寺から若い住職さんが、通夜、葬式とも二回来てくれた。戒名なしで納骨してほしいという申し入れに対して、最初かなりの抵抗があつたけれど、そこ



四人きょうだい

（左から二番目が奥井登美子さん）

は口の達者な兄貴のこと、五十五才にしてヘーゲル研究家（？）に変身し、親鸞とヘーゲルと福沢諭吉をミックスして砂糖を入れたみたいな奇妙な理論をおつたてて坊主をケムにまいてしまった。論戦の末、ついに納得、経料として十万円包んだ。

かかった費用は、祭壇が定価六十万円のが半額の三十万円。妹が職場の特典をフルに活かして、都の職員共済組合指定の葬儀屋にたのんだのである。半額だからといってサービスにvarietyなし、葬儀屋のセールスの人には早速桂米丸さんとアダ名がついたくらい、ニコニコと実に愛想がよく、仕事はテキパキとよくやってくれた。生花が六万円、焼場までのマイクパス代まで入れて雑費が三万円くらいで、葬儀屋さんへの払いは全部で四十万円たらずであつた。寺へ十万円、飲食代十万円、しめて全部で六十万円。母が二十万円とあとは四人のきょうだいで十万円ずつ平等に負担した。私も妹も職業をもつていたからこそ、夫に気兼ねなく負担することができたのかもしれない。

加藤清は、八月七日午前十一時三十分永眠いたしました。八十六才の天寿を全うした眠りは、まことに安らかで、大往生とよぶにふさわしいものでございましたが、猛暑の折から八月八日、ごく内輪の近親者だけで密葬を終りました。生前の皆様のご厚情に深く深く感謝しここにつつしんでお報せ申し上げます。

遺された者としては、生前、常に申しておりました「独立自尊」の精神的系譜を大切に、生かしていきたいと考えております。

なお、本人の遺志を重んじて、香典など一切拝辞いたしますので、本人がこの世における最後の我侭としてお認めいただきたいと思っております。

昭和五十三年八月九日

妻 加藤 みつ
子 加藤 尚文
〃 奥井 登美子
〃 藤井 君枝
〃 加藤 尚武

さて、葬式は知らせなかったが、父が亡くなったということは、生前なにくれとなく世話になった親せきや知人友人につつしんでお知らせするのが家族の義務というものであろう。

通知状を印刷し、母も含めて五人が、それぞれ必要だと思う相手に発送した。切手代その他こまかい雑費は自分もちにした。

「お淋しくなりましたでしょう」などと人に言われる。それがちつとも淋しくないのは、オヤジが、四人のきょうだいの、その日常性の中で、それぞれ形をかえてますます強烈に生きているような気がするせいかもしれない。

オヤジにはやはり、独立自尊居士がふさわしい。私は戒名のない父の戒名を勝手にそう決めた。

え・西田淑子

〈わいふ〉 既刊 特集

▶ 会員購読料・年間 ¥2520 (年六冊誌代 ¥1800・送料 ¥720)
A 5 版 54 頁 隔月刊・定価 ¥350

- 138号 天皇とわたしたち
- 139号 日本の夫
- 140号 家事を洗い直す
- 141号 親のきた道・子どもの行く道
- 142号 日本のおばあさん
- 143号 主婦とウーマンリブ
- 144号 なぜ結婚するのか
- 145号 子どもを預けるとき
- 146号 母性とは何か
- 147号 女と政治
- 148号 ニューファミリーの実体
- 149号 産む性から医師へ

- 150号 本音の子育て
- 151号 女の戦後30年
一暮らしの手帖にそってー
- 152号 男らしさは作られる
- 153号 老いと戦い
- 154号 活字ばなれのおとなとこども
- 155号 母親はどこまで必要か
- 156号 夫の転動

▶ バックナンバーの注文は直接編集部へ。

注 ●印は残部なくなりました。

私の初めての 育児体験

新宿区 末松悦子

女が娘から妻になり、そして、母親になる。痛みに恥をかなぐり捨てて赤ん坊を生み落とす。お乳が張り、赤ん坊が吸うことから育児が始まってゆく。世の中がどんなに進歩しても、インスタント時代になっても、赤ん坊は、十ヶ月もお腹に居るし、一年たたないと歩き出さない。便利さに慣れた若い母親にとつては、つらい遅々とした歩みだ。娘時代を気ままに過ごし、赤ちゃんとえば、テレビのCMでにつこり笑うイメージしか持たなかった私だから、こちらの都合

合もお構いなしに泣きわめき、思うようにお乳を飲まず、日に何度もウンチをする赤ん坊に初めて接して、右往左往したのも無理はない。学生時代は、教科書通りにしてさえいけば、いい子と教えられたのが、育児になったとたん、本の通りにはいかないものよと言われるのだから。そして、しばらくして、落ち着いてから考えた——友達の中には、仕事で活躍し、日々成長している人もいる。けれど、私が産んでしまった以上、赤ん坊は、確実に存在している。育児が、これだけ私の時間とエネルギーを奪うからには、何か、学ぶことがあるはずだ。また、学ばなくては損だ——と。

すると、赤ん坊は、実にうまくできていることを発見した。自分では何もできないが、人間として生きる手段をちゃんと持っている。まず、親に可愛いと思わせねば、世話はやいて貰えない。心を和ませる無邪気さ、柔らかい肌、両腕に全身を委ねる信頼、オムツを替える面倒を一瞬忘れさせる小さなお尻（不思議に、初めの頃は、ウンチも臭くない）等々。これらの可愛気を持たない大人の私は、働くことで糧を得、その能力も、容姿も衰えるに従って、内面から魅力を出していかなければならないのだなァと思う。

そして、一人歩きを始める頃、母親は、後から見守る立場になる。これは、これから続く親子関係の基本だと思う。子供は、未知の空間へ歩きます。日頃接している母親は、動物的なカンと、その子の運動能力を頭において、かすり傷程度なら、放っておく。本当に危険な時は、断固禁止する。そして、泣かずにいられない程、痛がって飛び込んできた時には、胸にしっかり抱いてやる。この関係は、成長に従い、精神的な要素に変わってゆく。

生涯で初めて見た私の顔を認めてくれ、私の匂いをかぎながらお乳を飲み、私の語りかけに全身の喜びを表わして答えてくれ、気分になかせて叱つてもすがりついてくる。こんな私を、無批判に受け入れ、必要とし、絶対的信頼をおいてくれる時期が、他にあるだろうか。我が子ながら、放り出したくなったことも数えきれないが、充分、お返しをして貰ったと思う。この子の人生で二度と来ない、柔かな肌の感触、マンガみたいな四頭身の格好。胸に抱く快感、瞳の輝き、等を感謝して、味わってきた。

乳幼児期の子育てを通じて、いろんなことを教えてもらった。子供の生命も、人生も、親の所有物ではないこと、歩みが遅くても、見守ってやる思いやりを持つこと、子供も、大人と同じ心理を持っていること、自分の

無念の想い

大宮市 小林和子

事は自分でできるようにしむけること、等。そうすると、子供が成長していく中で、母親も、自分を見つめ、生き方を考え、固有の価値観を確立していかざるを得なくなってくる。大げさかもしれないが、私達は、二十世紀の日本を支える日本人を育てているのだくらい、オーバ―に、育児を考えてもいいのじゃないか。そのくらいにおもわないと、この汚い毎日のくり返しは、全くやりきれない。

子供はすべて、女から生まれ、大人になって、社会をつくる。そして一人一人の人格形成に、一番大きな影響を与えるのは、やはり、母親なのだから……。幼稚園に入り、私の知らない時間と経験を持つようになった我が子の後姿を見てみると、私は、自分の作品を世の中に送り出してゆくような気がした。

妊娠したと知った時、私は臨床検査技師としての仕事は辞めたくないと思った。元来、子供は好きでなく、家事、育児に専念するより、私はこの自立した仕事を続けたかった。現在、女性の仕事をするという時、一番の難関は出産であろう。その時さえ乗り切ればほぼ安定した仕事を得られるのではないだろうか。私の場合は、その気になれば停年までも勤務可能であった。

しかし、ひどいつわりであった。妊娠中ずっと生まれるその日まで吐き続けていた。身体が重くて、昼休みに脳波室のベッドに横になると、そのまま起き上がれないような日があった。何度もトイレへかけこみ、吐き気をこらえてビペットを吸い、残業も毎日のようにした。今思うと、私ほど具合の悪かった人はそう多くはないのではないのか。けれどその頃はそれがふつうと思い、何より仕事を辞めたくない一心でがんばっていた。そして私は妊娠中毒症になってしまった。この病気の原因は不明と言われているが、私の場合は無理のしすぎだったと思う。産休に入り、実家に帰った頃は、水を飲んでも胸につかえるようになり、身体がまるで動かなくなった。歩いて五分の病院にすら行けなかった。医師が、このままではおなかの中でダメになる、入院して早く出さなければと言ったその日に、未熟児で生まれた。

子供は元気に育っていったが、私の方は少しも回復しなかった。産休の後、三ヵ月の休暇をとったが、もう辞めてほしいという病院側の意志があり、結局、私事都合による退職をした。それから一年余が過ぎた。あんなに苦しい思いまでして守ろうとした職場と仕事であったが、残ったのは腎臓をおかされた身体であった。どんな理由があれば、結局は自分の不節制だったと納得しなければならぬのは不合理である。妊娠出産はやはり女性のどうしようもない弱さなのであろうか。出産時に身体を悪くし、仕事を失った者が、私の友人にも居る。どこへも文句の言って行きようがない。がんばった分だけ損をした、という感じである。

けれどもいつか再出発したい。家庭に入ってしまうと、日々怠慢になっていくが、いざ社会へ出ようとするバネが、まだ私に残っていることを願う。

「母と子」から 「個と個」へ

府中市 赤井久美子

二年程前、丁度私が母親というものになったばかりの頃、小椋佳がそのコンサートの中で、「木戸をあけて」という歌の前に話したことが、印象深く記憶に残っている。

「僕は、生涯のうち、三度目にサヨナラを言ったように思います。一度目は十二、三才の中学生の頃で、二度目は結婚した時、そして三度目は母が亡くなった時です。」

あの歌は、「家出する少年がその母に捧げる歌」という副題がついていて、母と別れ、自らの道を歩きはじめる少年の、止むに止まれぬ思いを歌っている。

私はこの頃まで、子供にとって母親が必要なのではないかと考える。それは、もちろん、べつたりとソバについて世話をするというような意味ではなく、母と子の関係が母親と子供の関係でなければならぬという事だ。

そしてこの時期を過ぎると、母と子の関係は（もつとも親しいはずの）個人と個人という関係になっていく。

キツネやクマのような動物の社会では、「子別れの儀式」というものがあつて、ある日、その儀式を境に、それまで共に行動していた母と子は、個と個に戻り、新しい各々の世界へと別れていく。

自分自身のことをふり返ってみると、背丈が母に追いついた頃、私は母もまた、自分とは違う一人の人間であり、私の人生と母の人生とは違うのだということを知り、母の後ろ姿に、そつと別れを告げたのだつた。

母親とは

市川市 前田淳子

私は高校二年の時に母を亡くしている。母がいたらなあと思うことは結婚後三年半たった今でもある。子供を見せたいとか一緒にどこかへ行きたいとかいう感傷的なことではなく、出産・流産などの自分が動けない時に助けて欲しいと思つた。遠慮なく甘えられるのは自分の母親しかいないのではないだろうか。子供にとってそれはいつまでもいて欲しい人である。

しかし私の母はいないということであつてくれた。私を大きく変えた。脳溢血で突然亡くなつた時、弟中学一年、妹小学校一年だつたので家事の大部分は私が受持つことになつてし

まった。それまでは何一つ自由のない箱入り娘で味噌汁の作り方も知らなかつたのだから、それからの生活は私を徹底的に鍛えてくれた。気がつくといつの間にか家庭では母親役をやつていた。命令形の口調になり、

妹の入学式、卒業式等にも出席した。そうして生活力、忍耐力を得たが失つたものも勿論あつた。のびのびとした若さ、屈託ない開放的性格——最初から自分はそういう性質ではなかつたのかも知れない。しかしそれに似たものは確かに失つた。どちらが良かったか。やはり過保護的に育てられていたら私は自尊心ばかり強い何もできない女になつていたらう。幼い頃から知つていた夫はあのまま母親がいたら私を結婚相手に選ばなかつたろうと言う。

先日、公園で興味深い場面に遭遇した。二組の母子である。二才前後の男の子がすべり台の

踊り場に立って下を見ていた。するとそのお母さんが側に近づいて危ないから降りるよう促した。その子は滑らずに階段を降り始めた。お母さんは心配そうに一足動かすごとに声をかけた。子供は真剣だったが真中より少し上の所で足を踏みはずして下までドーッと落ちてしまった。お母さんは駆け寄りどこが痛いかに聞いていたが、子供は全然関係ないところを痛いといいつて泣いていた。少しすると子供はまた登り始めようとした。お母さんは「また落ちたらどうするの。もう帰りましょう」と言つて嫌がる子供を引っぱって行つた。片や、ブランコに乗っていた女の子は二才半位。へんな格好で乗ったので頭からドンと後ろへ倒れてしまった。まだ揺れているブランコにぶつかりそうになつたけど、さつと立ち上がりニコツと笑つてまた坐り直した。隣のブランコに坐っていたお母

さんも「何やってるの」と言つただけである。頭を打つたのだから、私は先の男の子の時よりぎくつとした位なのだ。その女の子は実に身軽で、猿のように（失礼）すべり台の斜面を手を使わずに下から上がつていったり後ろ向きに滑つたりするのだ。まさにこの母にしてこの子ありである。

さて私も母親になつて二年半になる。自分の子をみれば私の描く理想像とは全く正反對に私から絶対離れようとしなない。近くに子供がいけない環境で育つたせいもあるう、親達の性質の遺伝もあるう。しかし何といつてもまだ私が決定的につき離していかないからなのだろう。具体的に何才で母親から離すのがいいかは解らない。母親に全て依存する○才児より友達を欲する二才児、さらにその人間の性格が形成されるという三才迄は母親が立会いたいともいえる。さら

に四、五才だつて……と際限なく続いてしまひそうだ。自分の子を育てながら仕事ができたら素晴らしいなあと思う。それが不可能だつたら自分が何かを始めるチャンスをつかんだ時、誰かに見てもらわねばなるまい。四六時中、顔をつき合わせていなくとも母親の役目は果せそうに思う。

母親とは子供が最も甘えられる人である。どの位甘くしてあげるかは母親達の自由だ。しかし辛くとも酸っぱくとも子供は自分の足で歩いていくものだ。

榎さんに思う

東京都 北川洋子

派手な話題をふりまいて中ピ連の榎美沙さんが去つてからもう何ヶ月経つたのだろうか。も

う何年も過ぎたようでもあり、またたつた二、三週間のようにも思える。思い出の中でさえ普通の時間の観念から浮き上がつてしまつてゐる奇妙な存在の人だ。この頃よくウーマンリブの運動を批難するための好材料として彼女が取沙汰される。結局あんなばかげた空さわぎでしかなかったではないか、あの終末のみつともなさかげんが女性運動のつまらなさ、底の浅さを証明しているのだと。だが本当に彼女の運動は何も実らせはしなかったのだろうか。

歴史の中で実りあるという事の意味は何かと考える時、こんなにも鮮やかなスポーツライクをたとえ一瞬たりとも照らしてみせた事は決して意味のない事ではない。権勢を誇る政治家、術策に長けた実業家が彼らの一生涯をかけてくり広げた政策、事業も歴史の流れの中ではやはり一点のスポットに過ぎないの

だから、強制された慎みという足枷^{なまこ}をふりほどいて腰巻を振ってみせるような天真らんまんさを日本の女性が示すことができたのは、やはり素晴らしいことなのだ。

私はテレビでインタビュされる榎さんを見た事がある。他人の離婚問題に立ち入って女性の方を責められるべき点が多かつたらどうするかとの質問に答えて、彼女は明快に言い切った。

「どっちが良いか悪いかそんな事はどうでもいいんです。私は女性の側を必ず味方するんですから」と。この時私は日本の女性の中にいつの間にか従来と全く違ったタイプが生まれ出ているかと頼もしく嬉しかったのを覚えていた。

こんなにもカラッとしたユーモアを備えた女性が生まれているということは、複雑に仕組まれた、女性をからめとる社会の

ワナを破るのにもう一つ新しい武器ができたようなものだからだ。これは漫画だ、私は思った。

社会の重圧、女性への蔑視をこうしてあざやかに風刺できる才能、それが企^{もくろ}まれたものでもなく自然に彼女の身についているのを見て、何事もまじめに正面からしか取り組めない私のような古い女は憧れを感じた。女だから味方する、女だからこそ女の方に分があるのだ、これは無茶苦茶な理屈である。

ところがこれと反対の事なら無茶苦茶でも漫画でもなくまかり通っているのだ。「男だから正しい、男の方に必ず理があるのだ」女は男のその理屈を支える奉仕こそが美德だと教えられてきた。榎さんはその化けの皮をひっぱがして、それがどんなにおかしな事か示してみたのではないだろうか。彼女の奇妙な言動、オスカルばりの服装、みんな男の世界のうつつし絵だ。

しかし漫画は現実の世界ととり組んで一緒に存在することはできない。その諷刺がどんなに強烈でどんなに真実的を射たものであれ、所詮眺めて笑いとばされるだけにある。つまり彼女の運動はその発生の時既に非常にみつともない幕切れを演じるべく予定されているのだ。

しかし、もはや使い古してボロボロに骨まですけて見えるようなこけおどしの社会体制の舞台装置でがんこに男性上位を演じ続けようとする人々と、ヒョイと股のぞきでアカンベーをした榎さんと、本当はどちらが漫画なのだろうか。

彼女の運動が続かなかったことへの人々の嘲笑は、今の男社会がやはりこっけいである事を見透す目と、それをカラリと笑いとばすユーモアに欠けた石頭である事を自ら暴露しているのだ。色々な種類の女たちが現れて色々な種類の光り方をする、

これからの女性の将来が、私には限りなく魅力に満ちて広がって見えるのだ。榎さんの失敗を笑う声にくじけず、女性の仲間よ、大らかに信ずる事を行なう勇氣を持って生きましよう、私はやはり馬鹿まじめに提唱するのである。

“お能拝見” 拝見の記

神戸市 浅井俊子

一四五号から一五〇号まで連載の「お能拝見」毎号まことに楽しく拝読、そしていろいろとお教えたいただきました。私の様な老人にとつて何事によらず若い方々からものを教えて頂くという事は、世の中を、ほのぼのと明るく感じるとでも申しましようか、格別楽しいものでございます。この喜びを心一つに秘

めがたくおくれればせながらペンをとらせていただきました。

私は、昔たみの上で立ちの手ほどきをほんの少し受けたにすぎず、謡は習っておりません。それが昭和十二年ごろから数年に亘^{わた}って長女が仕舞のお稽古をする様になりましたので、その間折々は小学生の彼女に付きそってお能を見る機会をもつ事になったわけです。

何分未だ子育て盛りの三十才台でしたから、長時間の外出はできませんので、ほんの一番かせいぜい二番、それも能会の当日、故和田万吉先生がお書きになった謡曲物語などで出演曲目の梗概をあわだしく調べておいて、会場に出かけるといった有様でした。しかも、目が舞台の方に向いているのに、心は家に残してきた幼い下の子供達の方に向かっていくという始末です。何だか我が魂が二つにわかれてしまっているというやる瀬

なさを味わいながらの観能でした。

このような私ですから、一四五号に「どうも久しぶりに見ると、はこびがすべて格段に早くなっているように感じられました」とお話しになっているのを拝見した時、そのすべてをはつきり把握する事などはとても思ひ及ばぬながら、ふと、感嘆の声を洩しました。一つだけ思い当ることがあったのです。

ここに

『昭和十七年四月参日(祭日) 午前九時始』於・神戸能楽会館 故親世左近追善 能楽組と題した一枚の番組がござい

ます。三番目が松風で、シテはそのころの梅若万三郎師(当代の伯父様に当られるという事です)。前述の様に、私はそう度々お能を観たこともないのですが、不思議にこの曲には縁があり、同師の松風もこの時の外一、二回

は拝見しましたし、人に招かれて大阪で喜多六平太師の舞台を観せていただいたこともございました。しかし、観方がおろそかだったのかもしれませんが、敗戦前の体験では、村雨と向いあつて橋がかりを進む松風の歩みを、目で捉えることができなかったのです。いつの間にか位置が変わっているから、動いているのはたしかなのだけれど……という様な感じ方を抱いて居りました。

ところが一昨年五十一年の秋、勤労感謝の日に、神戸の上田能楽堂で、故上田隆一師の二十七回追追善能が催された時、文字通り久しぶりに参じまして当代万三郎師の松風を拝見いたしました。何も知らない私ですから、他に何を捉えようもなかった訳ですが、その時生れて初めて橋がかりを進む松風が歩くのを見たのです。こえて、五十二年の春、前に引用させて頂いたのは

こびがすべて格段に早くなっている云々の文字を拝見した時、私自身が経験した二つの感じ方をはつきりと取りまとめて頂いた様な気がいたしました。

私の三十代といえ、四十年も前のことでございます。年月の積りに加えて世の中も私の生活もすっかり変りました。一、二度しか観ていない曲目の印象は概して大変うすうござい

ますのに、前記の万三郎師の山姥を拝見した時の感激は忘れられません。すでにずい分のお歳とお聞きしていましたが、見る者に息もつがせぬまで、軽やかに逸^はく逸^はく、重りかにゆつたりと、大きく細かく、まっつまって舞いぬかれる様は、日々の生活精進が、たゆみなき修練の基盤となつてこそそのものと、つくづく感嘆させられました。

生涯に、もう一度で結構です。よいお能を拝見できたらと念じつつペンを置きます。

「わいふ」と私

蓮田市 会田智恵子



カット 林 慶子

私が「わいふ」とつき合いだしてから二年目になる。一度だけ、ハガキを書いたが、後は読ませてもらう一方で、今日に至っている。

「わいふ」を知った時、文章をかくことの好きな人が、こんなにたくさんいることに驚いた。とってもうれしかった。私は、今三才の娘が一人いるが、子育てに忙しいはずのこの時期の年代が、子供の寝静まった深夜にペンを動かし、何となく縁遠く思っていた四十代、五十代の方々が、編集に一生懸命だったり、その時々々のニュースに、敏感に批判の一筆をとったり……とにかく、年代的に固まっているというところが、頼もしく、好ましく思えた。

私は「わいふ」が届くと必ず、青と赤のボールペンで——や、~~~~や、?や、!などを入れて自分なりに質問や疑問、感想文を書きこんでいく。三日で全頁が、二色の色で染まることもあるし、家事に追われて途中からなかなか進まず、一週間や十日になることもある。でも、これは私が「わいふ」を知ってから、自分に課した大切な仕事で、楽しい義務でもある。

「わいふ」とこういうつきあいをしていると本当にいろんな文体に出会う。一人一人の個性がそこに見られ、「わいふ」自体がその結晶でできあがっていることを滲ませている。商業ベースにのった月刊紙や、雑誌、小冊誌にみる有名無名の随筆家の押しなべて整った文章じゃないところが、わが「わいふ」なのだけだと、

それにしても十人十色、いろんな文体があるのだなあと、感じってしまう。この作業に専念していると、文章を書くのと同じ位にあっという間に時間がたって全頁つづすのが惜しくて、次のチャンスまで延ばしたこともある。

「文章を書くのと同じ位」と書いたが、私は文章を書くのが大好きなくせに、今だからって「わいふ」に投稿したことがなかった。私のノートは「わいふ」目標の雑文がいっぱい詰っている。でもどれ一つとして、「わいふ」の活字にするには恐しく、書いている時は夢中で、夜明け近くなっていることさえあるのに、いざ書きあげて、それをさらってみると理屈っぽく、稚拙な文章にガッカリして、どうしても原稿用紙まではいかない。

この青と赤のボールペンでの感想文の中で、「私もこういう文章を書いてみたい」という書き込みが、私には割合多い。文章がやさしく、ひらがな調の文体に私は魅かれる。いざ文を書くという段になると、やたら難しいことばを考え出し、やたら愛読小説家のクセをまねする。とにかくかまえてしまうので、すぐに行き詰まる。二年前に義母を、直腸ガンでみとった時、（そのちよつとまえに「わいふ」を知ったのだけれど……）生から死への目の当りの体験を自分なりにまとめようと、少し落ちついてから書きだしたのだけれど、どうしても他人の思惑など気にしだすと、頭の中がこ

んがらかって、少しおいては書き少しおいては書いてみたけれど、半年かかってても正直でなくうわすべりの文章になるので、書いても「書かなければ」という観念にしばられたみたいで全然楽しくなく結局、断念した。断念して、すっきりした。いつか、ゆったりした気持で義母のことは書いてみたいと思うけれど、その時ほど私は「書く」ということが「義務」ではだめなんだと思ったことはなかった。ハナうたのように、自然にでてこなければ……。今、こうやっていて思う。小説家にならなくてよかった……（図々しい!!）

話は脱線したが、やはり、文章はほのぼのとさりげなく自分の心を伝えられるものを書きたい。田辺聖子さんの「夕ごはん、たべた」のように……。どうせ、そこまで（足元に到達することさえできないのが）わかっていても、せめて自分の書きためた文章を、初めから楽しく繰れる位にはなりたい。

私の精神生活の中の「わいふ」は、本当に大きい位置を占めている。六畳の部屋の中で、コツコツ、ノートを埋めているとき、こういうことを「わいふ」の誰かも、今、やっていると思うのは、何となく孤独感に押しやられているときには、救われる。同じことをやる仲間がいると、確実に感じられるのは、本当にホッとする。

こんなふうに思うのは、私だけであろうか？……

特集座談会

東西転勤事情



出席者

荒	ミリアム	(ベルギー)
コリンズ	圭子	(アメリカ)
ジュリアン	クロード	(フランス)



司会・編集部

林 慶子

司会 みなさんお忙しい時間を割いてご出席下さいましてありがとうございます。まずご転勤のご経験はどれくらいおありか、その辺から伺いたいのですが……。

ジュリアン 一九六四年にフランスを出て、東京に二年、パリに帰って二年、メキシコに三年、また東京へ来て今年で三年目です。夫は銀行につとめてます。

荒 夫は外交官ですから、八年の結婚生活のうち、四年は外国、四年は日本でくらししました。カンボジャから始まって、パリ、東京という順序です。

コリンズ アメリカ国内で転勤五回、今度で六回目で日本へ来たわけです。それぞれ二年ぐらいずつでしたね。夫のつとめ先は保険会社です。

司会 どうでしょう、みなさん、結婚なさるとき、転勤を予期していらつしやいましたか。**ジュリアン** 全然！ 私は大体、結婚前に、転勤とは全く両立しない勉強をしていましたもの。洞察力の不足というか……（笑）専攻したのが古文書学でね。文献を整理して研究者の役に立たせるために管理するという仕事でしたから、フランス以外ではまったく役立たずの仕事なんです。娘の一人が自分もやりたいと言ったんですが、よせよせと止めま

した。

荒 夫の職業柄、一生の半分は外国暮らしというのは覚悟してましたけれど……。結婚前は建築関係のPR誌の仕事をしていたんですが、外交官の妻になる方が面白いと思ってやめたんです。（笑）

コリンズ 転勤は、より良い条件で働けるからこそ承諾するわけでしょ、ペイにしても、仕事のインシヤティヴにしても……。私自身にしてみれば、何らかの意味でつながりのあったところでは働けたけど、ないところへ行ったら自分の仕事はやめざるを得ないんですね。どうしても。私のために夫の仕事を断るわけにはいけませんもの。いやだけど、仕方がない。もし私の方にもっといい仕事があれば、よさせることもできるでしょうけど……。やはり、家でできる自由業についていれば良かったかな、と思ったり……。妻に良い友だちがあったり、職業があったりしても、夫の会社のオフィスの内容がよいとやっぱり動いちゃいますね。

転勤は生活のアクセント？

司会 転勤は、妻にとつては根なし草になる傾向が多いから、さぞや嫌われているのでは、

と認めてそういう投稿を期待していたんですけれど、驚いたことに、今回わいふに舞いこんだ投稿は、むしろ転勤を喜ぶものが多かったんですね。意外でした。その原因に、お姑さんとの同居から解放される、というものがあって、日本の家族制度の息苦しさを改めて感じさせられたりもしたんです。欧米ではいかがでしょう。

荒 それは解るような気がしますね。日本の女性の生活、本当に面白いものではないですもの。西欧の家族関係はもっと緊密です。夫が妻と、子どもの生活にもっと関わりをもつてくれますから。

日本の場合だったら、土地が変わることによって見聞も広まるし、新しい友だちもできるし、プラスの面が大部分あるんじゃないでしょうか。もちろん子供の教育など、マイナス面はつきまといますけれど……。

コリンズ アメリカでは転勤によって、親しい家族と離れるのがつらい、と考えることが多いですね。喜ぶんじゃないか。

司会 大体日本人は会社に対する帰属意識が強いから、転勤一つにしても外国とは大分受けとめ方が違うんじゃないか、という気がするんです。何しろ終身雇用制で、会社第一、自分の生活は二の次という考え方がしみつ

いますでしょう……。

ジュリアン 日本だけとはかぎりませんよ。フランスだって、そんなにチョコチョコ転勤できるものじゃありません。

荒 でもやっぱり終身雇用制は日本の方が根づいんじゃないかしら。教育を受けているときから将来どこにとめるって考えているみたい。ヨーロッパにはありませんね。

ジュリアン でもそういうシステムに組み込まれている人は日本でも大会社の人だけではないの。パーセンテージでいえば三〇%ぐらいで、フランスだってあまり変りはないのではないかしら。

荒 いえ小さい会社だって、一度入れば一生いる、というのが日本のつとめ人の基本的態度だと思いますよ。もっと条件のよいところがあり次第変わる、という気持ではないみたいね。会社が倒産でもすれば別ですけど。

西欧では、つとめるとき問題になるのは、この会社でどれぐらいの給料をもらえるのか、それで自分の家族が食べていけるのか、という個人生活を主にした考え方ですね。それがうまくいかなければさっさと転職しちゃう。ジュリアン たしかに三〇才、三五才ぐらいで転職する人、よく見かけるわね。

コリンズ アメリカでは愛社精神なんて皆無



(コリンズさん)

です。よい条件のところがあればさっさと変っちゃう。日本では第一、そういう選択する可能性がないでしょ。

司会 会社にすまないとか、そんなことは考えないわけ？

コリンズ もう全然！ アメリカでは、職を変えるのがカンタンでしょ、ともかく。夫のいたファイデルフィアのオフィスでは、一年のうちにスタッフの変わったこと、すごいものでしたよ。五〇%ぐらい出てつちやったかしら。

司会 信じられない数字ですね！ フランスはいかがですか？

ジュリアン そんなことはないわね。

荒 とくにあるレベル以上の職業ではね。

転勤と年金と転職と

ジュリアン だって停年後の年金問題があるでしょう？ そんなにチョコチョコ転職したら、年金にひびきますもの。

司会 国家の年金ですか？

ジュリアン 国のもあるし、他の組織のでも。官吏だったら国のですけれども。転職したら年金額がぐっと変わってくる。

コリンズ ああ、アメリカでは最近——ここ二年ぐらいかな——それが変わってきたんですよ。年金を持って歩けるのよ。転職しても条件が変わらないの。

ジュリアン 私企業のケースでしょう？ フランスではないと思う。そのシステムは。

コリンズ いえアメリカでも以前は違うシステムだったんですよ。でもこれは社会保障ではないの。保険みたいなもののね。お金を払ってシステムを買うわけなんです。

司会 アメリカというのはいささか実質的なシステムがありますねえ。結局は個人が自分でお金を払うわけだけど、国家が面倒をみてくれるというのも最終的に払うのは国民なんだからどっちがよいのか、ちょっとわかりませんね。

再就職のときは、エージェンシーにでもたのめですか。

コリンズ いえある日突然向うから電話がか



(荒さん)

かってくる。これこれの会社でこういう人を探してるんだけど、おたくはどうか、って。そっちの会社の条件が少しでもよかったら、動いちゃいますね。そういう人に目をつけられる人は能力がある、ということになって一目おかれるわけなの。

司会 今までの人間関係がバツと変わるわけでしょう、そこで。そういうことについての抵抗はないんでしょうか。

コリンズ ないみたいねえ。

司会 会社以外のところに自分のコミュニケーションをもっているから平気、ということかしら。
コリンズ いえ会社の人ともつきあいますよ。家族ぐるみでつきあうという点では日本の会社人のつきあいよりも深いんじゃないでしょうか。それに日本のつきあいと違って、上下

の関係をそれほど気にしませんね。もちろん本社の社長夫妻がくるなんていうと多少は緊張しちゃいますけれども。

司会 会社をやめたら、今までつきあっていた人たちはオサラバ、なんですか。

コリンズ そんなことはないです。やはりつきあいは続くんですけど、何ていったってアメリカは広いでしょ。ボストンからニューヨークといったって何時間もかかるし。クリスマス・カードぐらいのつきあいになってしまふんですよ。

荒 日本の上下関係というのはすごいものですね。私のところではいつも、それ聞かれます。おたくは何年組ですか。それによって序列がついているんです。奥さんに。私の夫若いですから、ああ、あなた、下^{シタ}つて。(笑)あなた、上^{ウエ}、あなた下^{シタ}つていうのがいつもつきまっています。(一同大笑)

司会 最近の若い女性英語の達者な人多いでしょ、大使夫人なんているのは古いから比較的英語が下手、そうすると若い奥さん、その前一言も話さないそうですね。外務省あたり、日本でも一番そういう古さが残っている場所なんじゃないですか。

ジュリアン ともかくフランスでは、若い時から停年後の年金のことをいつも考えている

んです。転勤の問題もそれからんでいますね。老後をどれだけの金で暮すかということ、これ基本的ね。

コリンズ 日本ではどうしても、子どもが養ってくれるだろう、というところがありますね。

ジュリアン 一人の子どもが一人の親を養うなんてできませんよ。二人でも……。

荒 日本では大多数の親が老後を年金だけでは生きられませんものね。子どもに頼らなければ……。第一、教育費が日本ではとても高いでしょ。大学まで行かせようと思えば。自分の老後にとっているお金を、教育費にまわさざるを得なくなる。親は自分のことを考えているヒマがなくて、いわばその日暮しという感じ。悪循環ですね。

ヨーロッパでは、子どもの教育に金をかけたら、あと自分たちはどうなる、ということも考えています。どんな親でも、子どもの世話になる、ということは好みません。自分の経済が許す範囲で、どう生きていくかということがまず基本的な考えかたですね。

コリンズ アメリカでも、ピッツバーグで子どもが親を訴えた例がありましたね。父親が自分の月謝を出してくれないって。経済的余裕があるのに……。

(ジュリアンさん)



司会 訴訟の結果は？

コリンズ 親が勝ちました。月謝を出せるか出せないかっていうのも、私たちの基準と違うんですよ。例えばサマー・コティジを持つてるのに、子どもの月謝はこれだけしか出さない、となる。日本で言ったら、サマー・コティジなんか売り払って月謝を出すの、当然でしょうね。

二年ごしの転勤よしわるし？

司会 日本では会社の転勤命令は絶対的なものとして受けとれがちですけど、欧米の場合はいかがですか？

コリンズ 今までは割合そうだったんだけど、最近断るケースが増えてきましたね。出世す

ることばかり考えないで、自分の生活が大事だ、ということが考えられてきたようです。

司会 皆さんはいかがでしたか。

荒 私の夫は外務省だから転勤というのは始めから分っていたことです。当然のことではないこととは別に思いません。夫が望んでいるときに自分の小さなエゴイズムでそれを妨げるようなことはしたくないですね。ただもちろん、子どもの教育などで問題はあります。何といっても根なし草になって……とくに国外では、日本人学校のあるところはいいですが、それでも、そうでないところは大変。

コリンズ 転勤して大体その土地のことがのみこめて、一人前に活動できるまでまず半年はかかるでしょ。どこに何を安く売つてるとか、何のクラブがどこにあるとか……。すっかり一人前になった二年位で、また転勤、とくる。

ジュリアン 外国で二年暮すと、大体その土地のことが分った、という感じになるんですけど、ところがまた二年もすると、実は全然分っていないかったんだ、ということが今度は本当に分ってくる。ある国を本当に知るためには、やはり十年はかかる、ということだと思えますね。

司会 フランスの場合、任期は大体二年なん

でしょうか。

ジュリアン そんなところですよ。

荒・コリンズ 大体同じですね。

司会 日本の転勤は間隔が短かすぎる、と言われますけど、やはり似たりよったりですね。ジュリアン でも考えようによれば、どうせ本当のことが分らないのだから、二年ぐらいで移るのも悪くないんです。一応のことは分りますからね。外国のこと何も知らないよりはましです。ベター・ザン・ナッシングです。**コリンズ** アメリカではね、新しく移ってきた人にサーヴィスする機関があるんですよ。ウエルカム・ワゴンといってね。そこへ行くと安い店の割引券なんか置いてあったり、どこに何を売っているとか、日常生活に関する情報を入れてくれるんですよ。

司会 自治体でやっているんですか？

コリンズ いえ違います。組織はよく分らないけど……。案外その安売店がやっているのかも。

荒 フランスでもありますよ。パリの区によつては、子どもを預かったり、買いいもの案内したりというところがあります。自治体でやっているんですよ。

司会 日本では引越してくると向う三軒両隣に引越そば、というけれど、アメリカあたり

では近所の人々がもうこうから訪ねてくるって言いますね。

妻について行く夫も

司会 同じ転勤でも、妻が職業をもっている場合は深刻だと思いませんか？

ジュリアン 妻が働いているケースがだんだんふえていますから、それが原因で夫の転勤を妨げる場合がたしかありますね。数としては、ますます増えてきています。

私の知人に法律家の夫妻があつてね、東京に夫が転勤になって、奥さんもさんざん職を探したんです。探したんだけどなかなか見つからなくてね。結局だめだと思った時に、やっと見つかった。その前に彼女の夫が、もし妻に仕事が見つからなかったら、僕はもう日本を離れる、とまで言っていましたね。子どももないし、これじゃ余り妻が不幸だからって。いまは二人とも法律事務所で働いています。

司会 うまく行っているケースですね。

コリンズ アメリカでは女の人について働くダンナもいるんですよ。女の方の仕事がいい場合にはね。会社のマネージャーとか。

司会 夫の側に抵抗はないのかしら。



(林さん)

コリンズ その夫婦の場合はないみたいにみえたけど、全体的にみればあるでしょうね。今でも女のボスの下で働くのはいやだなんていう男の人もいます。

ジュリアン ヨーロッパでは、男が女のほうについて歩くというのはまだほとんどありませんね。

コリンズ アメリカでは女性大使が外国へ行く場合なんかありますね。夫は別居するんでなければやっぱり行っていく。

司会 日本では稀どころかぜんぜんありませんよ。

コリンズ アメリカでは前にも言ったとおり、職を変えるのが簡単でしょう？ だから奥さんの転任に旦那がついて行って新しい職を探すというのもできないことではないわけ。

ジュリアン でもフランスではまずあり得ない話ですよ。男が女について行くことはトラブルのもとです。妻の力が夫のそれよりも強かったら、夫は男性としての虚栄心を傷つけられるから、彼は無意識のうちにそんな事態を避けるように努力すると思います。

司会 統計によると、フランスの男性はずいぶん家事をして妻を助けているみたいですが、**ジュリアン** 若い人の世代ではふつうになっていますね。パンを買いに行ったり、掃除をしたりというのは、でも職業生活において、報酬の面で男が女に劣るというのとは、やはり自尊心を傷つけられると思います。シモーヌ・ヴェイユ元大臣も、夫にずいぶん足を引張られたということですよ。こういうことを変えるのはずいぶん時間がかかるでしょう。

コリンズ フランスの女たちは男の操縦法がうまいのではないかしら。一応はトップの座にすえておいて。正面きつて戦う、なんていうのではなく……。

ジュリアン フランス式操縦法なんて言われるのは心外だね。いろんな人がいるし、いろんなやり方があるんですもの。世代によってものすごく速く変わる部分もあるし……。

コリンズ シモーヌ・ド・ボーヴォワールがずいぶん変えたのでは。

ジュリアン あの人のもう、オールド・ファッション。

一同 どうして！

ジュリアン 彼女はたしかにあの時代としては進んでいたし、プリンシプルを作ったわけ。だけど現代の若い人にとって、彼女の作ったプリンシプルはもう、当然のものとして考えられていたのよね。もう過去の人よ。

司会 個人的質問で悪いけれど、ジュリアンさんは夫の転勤で自分の仕事をやめるときは、残念には思いませんでしたか。

ジュリアン もちろんです。とくにメキシコへ行ったあと、パリへ戻ってから、運よくまた役所の仕事につけましたから。家庭の外に出て働くことができて本当に楽しかったですよ。ところがまた、転勤になっちゃって。

コリンズ 一般にアメリカでは、セクレタリーの仕事なら移った先でもまず見つかるのよ。司会 そんなに簡単なものですか。失業がふえているというのに。

コリンズ それは職種によつてです。学校の先生とかね。第一年令制限が全然ないですから。(感嘆の声) こっちへきて、ジャパンタイムスの求人広告に、二八才とか二五才までと出ていたの見て、びっくりしました。あれは差別。アメリカではその差別は一応ない、

と言われている。

ジュリアン どんな職種でも？

コリンズ どんな職種でも。ともかく広告にそんなこと、書けないんです。男とか女とかの差別もね、公式には書けません。

司会 デパートの店員には中年以上の人が多いですね。若い人の仕事がそれでなくなることはないんですか。

コリンズ そうですね……デパートで働く中年女性が多いのは、やはり熟練を必要としない職業だからじゃないかしら。若い人が応募すれば採るんじゃないですか。

転勤はそろばん勘定で

司会 妻の反対で転勤がおじやんになるということはないでしょうか。

ジュリアン もちろん、妻が承知しないのに夫が転勤を押しつける、っていうことはできません。二人で話し合つて決めるんです。

司会 会社の命令でも？

ジュリアン 絶対ないですね。妻が同意しなかったら一人で行くしかない。

司会 日本じゃ辞令一本で、一〇日以内にどこそこまでとばされる、なんていうこともあるといいですね。女房に相談しまして、

なんて言ったら鼻つまみか笑いのでしょう。何を言われたってハイハイで……。

荒 今夜は一時まで残業って言われても、同じように従うでしょう？ 日本って。断つたりしたら会社にいられないっていう感じね。

司会 フランスでは妻が同意しないので、同じポストに居座っているというケースはあります。

ジュリアン そんなこと、始終ですよ。ことに外国への転勤は、自分の国から出るのをいやがる人間に、そんなこと強制できませんもの。断つたつて、だれもそんなこと非難する人はいません。外国へ行けば、ペイもずっと良くなるし、仕事もバリバリできる。いろんな特典もある、ということとで納得ずくで出る。最近フランス人も、そういうことが分つてきて、以前より外国へ行きたがるようになってきたんです。そうなれば妻のほうも、同じ利益を享受できるからということ、で、いっしょについて行くということなんです。

(通訳・まとめ 田中)

私は「わいふ」会員の富沢と申します。

いつもあなた様のお書きになったものを読ませていただいて、お名前だけは頭の中にありました。実はもっと早く気がつけばよかったのですが、同封の書状を「あらんいた

だくとおわかりの通り、昨年五月に主人と二人で旅行しました際、京阪浜大津駅前にて財布を拾いました。その後、もう取りに行くこともできないし……と諦めていたのですが、「わいふ」が届いた瞬間、ふとあなた様のことを思い出し、名簿で確かめましたら、やはり大津市にお住いのご様子。また、地方公務員とのことは、先に読ませていただいていたので、もしかしたら県警の本署のお近くでは……など、勝手に推察してしまいました。みすみす県警の財産になるのも勿体なく、もし取ってきていただけるなら「わいふ」の寄附金として使っていただけなのでは、と思った次第です。

(後略)

この手紙の主は、東京都の富沢昭子さん。「わいふ」の会員は全国にちらばっていますが、誌上でお互いに名前を知り合った人たちが、何かの機会に思いがけない力にな

りあう——こんなうれしい例をひとつご紹介してみます。

富沢さんは、おつれあいと二人で旅行されたとき、大津市の駅前で一万円余在中の財布を拾われたのです。

富沢さんはこれを警察に届けたものの、落し主のでないまま半年経過。ふつう落し物はこれで合法的に拾い主のものになるの

うれしい
はなし

ですが、なにしろ富沢さんのお住いは東京都、拾ったのは旅先での大津市。往復の汽車賃だけで足がでてしまいます。

そこで思いついたのが「わいふ」の会員のこと。というわけで大津市の中野桂子さんあての前記のお手紙となりました。お忙しい中から中野さんは快諾。そして編集部に舞いこんだのが一万円余在中の中野さんか

らの現金書留です。

本日(十七日)子供の病気のため代休をとりましたので県警へ行き、一万九百円也(財布の中味)を受取ってまいりました。

富沢さんのご意志により編集部へお送りいたします。恐縮ですが、お受取りいただきましたら富沢さんへその旨ご連絡くださいますようお願いいたします。(後略)

富沢さんと中野さんのリレーのおかげで寄附をいただくことになった編集部一同、大感激です。お金の多寡はともあれ、こうして「わいふ」のことを考えて下さる方がいらつしやるということ。そして「わいふ」の誌面や、名簿を通じて、ほんの少しでも実際に人間のつながりをつくることのできたということ。

これは本当に嬉しく、楽しいことでした。名簿をつくるとき、悪用されるから……というご意見のかたもおられたのですが、こうして積極的に活用できるなら、名簿もずいぶん意味があるのではないのでしょうか。誌上での、あの人、この人……お互いにもう一歩踏み出して、つながりを作ってみませんか？

闇か暁か？

原 三枝子

結婚して八年目にそのチャンスは訪れた。当時わたし達は、夫の郷里に両親と六才、四才の子ども達といっしょに住んでいた。世はまだ二十年代、永いしきたりの中での嫁のおかれた世界は、今と大違いに息苦しかったものである。夫には不足がなくても、若かったものだから姑とどうしてもうまくいかず、毎日暗い気分で暮していた。とにかく自分はずっと別の世界で生きようという決意を固めていた時期であったことは確かである。

そんな中で、稲刈りがはじまったばかりの初日に、わたしはあのギザギザのついた稲刈ガマで左手の薬指をグサツと派手に切ってしまった。猫の手もなんとやらのとき、当然困惑げなまわりの表情を背中に感じながら医者へとんだ。骨の髄まで痛むとはあのことだろう。いく針か縫うあいだをベッドでふるえが止まらず、天罰だと思った。

三、四日後、関西に住む義妹が入院したとの報せが入り、ものものしい包帯すがたでは家にいたところではたかが知れている、両親の代理で見舞に行く羽目となった。

十月末、まだ抜糸もすまぬ手に信州りんご

籠をもたされて心の傷もいえぬまま駅にむかった。送ってきしてくれた夫の

「ぼくも考えていることがある。すこし待て」

いわくありげな言葉をとくに、夜汽車に乗った。このとき、彼の耳に転勤内定の話はすでに入っていたはずである。

わたしは、旅さきで転勤のニュースを初めて知った。全く突然のことであった。夫が電話でわざわざしらせてきたのは、崖つぶちをさまよっている女房に、一刻もはやくとおの思いだったと思う。おもえば、いき着くところまで悩み抜いているなかで、どうしても転勤という逃げ道があることに気づかなかつたのだろう。

親しいの者から電話の内容を伝え聞き、夢ではないかと驚いた。とにかく想像もしていなかった東京転勤だ。古くさい表現をすれば暗夜に光明である。悲痛な気持でじぶん独りタクシーを探そうとしていた矢先、さあお乗りなさいとむこうから止まってくれた車に、親子そろって乗ることができるのである。眼の前がパアッとして明るく開けるとはこの状態をいうのだろう。

戦いはすんだ。「最も暗き時が最も暁に近き時」の名句をしみじみと味わったものである。

かくして二十年、さまざまな歴史を築いた東京生活も、やがて初老の夫婦ふたり、ここを去る日が近い。転勤というより、人口過密化緩和のための官庁移転である。子達の独立、姑の他界、ようやくにしてたどり得た人生の安全地帯、アレコレと思ひ描くわたしの目

標を知ってか知らずか、運命の神さまは、こんどは意地ワルをなさるおつもりらしい。

できれば、わたしは小さなマンションでもみつけて住み、長年苦勞をかけた夫ののには、うんという女でもと思わぬわけでもないのに、むこうは、そんなことは面倒くさいだつて。人間いくつになってもものぐさにならない方がトクだと思うが――。

所詮、サラリーマンとは、浮草生活なのだときらめることに尽きそう。人生、一寸先は闇でもあり、晩でもある。

(東京都)

子の立場から

白水 光子

そろそろ夫も転勤の時期にさしかかってきたらしい。最近その様な話題がしばしば口に出るようになってきた。転勤といつても夫の場合ある範囲内からの選択となるが多く、拒否権についても大に行使されるので、その点では恵まれている方だと言えよう。とは言つても、「転勤」と聞かされると私にとって心中穏やかならざるものがある。それは特に転居を伴うような場合著しいものがある。

当地に住み始めて三年半、やっと地域の様子がわかりかけ馴染んできたところであり、これからこそ生活者として大いに楽しもうと思っている時だからである。

新しい土地での新しい生活は魅力もあるし、それなりに意義深いものであるのは十分承知しているのだが、やはり心情的にはどうしても現在の安定を失いたくないと思ってしまうのである。

私は小学校を三回転校し、高等学校も都立と地方の市立と二校で過ごした。父の転勤が理由の転校だった。父は仕事柄よく転勤させられた。そしてそれは全て辞令発令から十日以内に完了させなければならぬのが規則であつた。母は仕事の引き継ぎに忙しい父に代わって一人で引越し騒ぎを仕切っていた。それはそれは慌しい日々で感傷に浸っている余裕など無いに等しかった。それでも社宅や教室での小さな送別会では「別れ」の寂しさをいやという程体験させられもした。八年前前であるが最後の引越しを行なった時に母が、何回も引越したがついにプロにはなれなかった、と言つた言葉が私にはとても印象的であつた。長年の転勤生活を顧みて、その時々状況(祖母の同居など)や子供の成長過程で起つてきた問題が如何に母を悩ませていたかを知る思いがした。

もつとも、大変だったのは母だけではない。転校生であつた私にとつても父の転勤は決して有難いものではなかつた。西も東もわからない土地に着いて、ある朝初めて見る学校に連れてゆかれるのである。教科書も進度も違い、友だちもない全てが初めての学校へ行かねばならない時の気持は不安のみで一杯だった。そしてただ一人の味方と思つて全信頼をおいているは

ずの担任教師にも案外冷たくされたりして悔しい思いをしたこともあった。それでも小学校程度であれば、子供達の反応はストリートであり、何やかや近づいて来てはおしやべりをするので、第一日も終わりになる頃には友だち風のクラスメートができたものだった。そして時間がたつうちには本当の友人ができてきたが、その頃になるとまた転校させられ、せっかく芽生えた友情も去る者は日々とうとうということになってしまふことが多かった。

しかし高等学校の時の転校は青年期だけにそんなに簡単なものではなかった。先ず両親と下宿通学をするか否かでずい分議論をしたものだ。結局下宿通学生生活をよく知っていた高校の担任教師の言葉に従って転校を決意したわけだが、しばらくの間は両親も私も割り切れぬ思いで悩んだ。俗にいう都落ちだっただけに迷いも大きかったのである。会社には転勤のための子弟寮もあるにはあったが、男子のみとされていたし、数も少なかったので利用するのは不可能であった。また実際利用していた子供たちからは余り好意的な反応は得られてなかった様にも聞いている。尤もお蔭で編入試験の方は楽であったし、授業についての心配もなかった。(しかしこれが都立への転校であればこう順調に事が進んだか否かわからない。或いは高校浪人となっていたかも知れない。義務教育でない場合の転校は難問であると思われる)

だが問題はそれだけではなかった。転校生の私は交

友関係でどうしてもある一線を越えることができなかった。二年という月日では馴染むことすら難しかったのである。受験体制に入ってから二年間であるからお互い心を開ききれぬ状態であった為かもしれないが、どう積極的に入り込もうとしてもいつもどこかで他所者を意識させられてしまったのである。土地に根ざした生活を送った者だけがもっている一体感。彼らには無意識の産物でしかなくとも、転々とした暮しを送らざるを得なかった私にとつてそれは大変貴重なものと思えたのである。

こうした高校時代の私の心の拠所は生まれてから小学校一年の二期まで生活し、小学校四年の三期から高校一年まで暮した東京だった。特に後半の足かけ七年の東京生活は同一の杜宅であったので、小学校から高校まで同じ学校に通った友人もでき、彼女たちとは生涯の友となれそうなので、私の転勤生活のせめてもの救いとなっている。

「転勤」と一言で言ってもその中には様々な状況下のような転勤があると思う。だから一概には何とも言えないと思うが、私のささやかな体験から言わせて頂くなら、転勤の拒否権が堂々と使える様な制度にして欲しいこと(拒否した為に将来を脅かされるのでは困るから)、転居を伴う転勤の場合は必ず一度出たら戻れる様にしてもらいたいこと(転々とは本当に根なし草にされてしまう)などである。日本の習慣から察するところ、アメリカの様な移動社会とも言えるよ

うな社会体制（転勤者等には大変便利に都合良く全てが整えられる様になっていると聞いているが）に変遷する事は期待できそうにないから、今後も個人が積極的に取り組む以外に転勤対策はなさそうである。それにしても紙切れ一枚のために今後の人生までも翻弄されたくはないものだとか切に願う私である。（松戸市）

転勤は転機

大友エミ子

テンキン、その言葉を耳にした途端に浮き足だち、心軽やいでくる。殊に一ヶ所に四、五年も居た時なんぞは尚更である。

何せ引越しを女一人で済ませようとすると、前は運送屋がアタフタと積み込み、運び上げてはくれるものの、後は野となれ山となれといった調子で、後の仕末はそれこそオオゴトである。

気力も体力もさして無い私は何と一年位も部屋の隅やらベランダに段ボール箱をころがしている有様。

その上、方向オンチときている。引越した我が家にすら帰るのに当分の間迷うしまつ。

それに見る人観る物珍しく、ご丁寧にもいちいちそれ等に興味を示し、片付けは何時でもできる、それよりチョットこの人と、また、あそこは何ゾ、と気が散る一方で、おかげで家の整理ははかどらず、そうして

その間は夫・子供・人生のあり方などドサクサの中に紛らわしてしまふのです。

引越し当初の身軽さといったら、さながら旅先の如く、解き放たれた気持ちになり、こちらから出向かぬ限り誰も訪ねてくる心配はなし、子供達も荷物の間をはしやぎ回る。

最初はいつも「ヨーシ今度こそは一年くらいは誰とも近しくせず無関係に傍観者でいよう」と決心するのに、それも束の間、すぐに誰と会っても目つき、声つきまでもが「アナタ好きよっ」と言った具合になるのには我ながらどうしようもない。

全くもって調子いいというか軽々しいというのか即座に相手に乗るといふよりは、もう跳びこんで融け合っってしまう気すらします。

「ホント、ホント」と感激し、後で「シマッタ、ウカツ、バカだった」と後悔すること度々です。

それでも「何も無かったよりは良かったわ」などと思うものですから懲りるということがいつこうにありません。

最初はとにかく、目新しいということだけで嬉しく、だんだん異色の人には興味をそそり、同色の人とは相乗作用で増々、色濃く結びつき、そうして一番身につまされて学ぶ対象となるのは常に好きになれない人達である。

反撥するのは自分の中に同じ極があるからであり、また、ともすれば自己に溺れて流れている精神にこう

いう人達は、世間のキビシサ、大人のツトメと言ったものをピシヤリと眼の前に叩きつけて、思い知らせてくれるのです。

好きな人とは、なるたけ一緒に過したいし、嫌いな人も何やら自分のことのように気にかかるし、前者は物理的に後者は精神的に、ともかくにも私の時間を浸食し、知人がふえてその配線が複雑になり、混がらがつて、何が何だか判らなくなり、振り回したり、振り回されたりしてくると、これを待つようになるのである。

「転勤」それは現在のしがらみをうまく断ち切る手段となり、またかつて出会ったような素晴らしい人達と知り合えるチャンスにもなるのです。

そうして、それ迄は地図でしか知らず自分にとって存在しなかったも同然の土地が、何年か暮した（行っただけでも）ことによつて、身の一部がそこにあるように感じられ、そういう分身と現在の自分を繋ぎ合わせることによつて初めて得られる感覚、単に点や線でなく、こう立方的というか体積をもつて生きているという実感、これはやはり己の身を動かすことによつてしか得られないのではないのでしょうか。

それが土地つき、家つき、自分は根つき、となつては、狭い世間がいよいよ狭く、夫と子供に根は貼りつき、人も周囲も色あせて『今日も又かくてありけり、明日も又——』となりそうな気がします。

そうそう転勤でイヤなこと、それは会社の方々の

見送りです。

思い出すだに頭を振りまわして忘れたくなります。

新婚旅行のそれと大差なく、汽車が出る迄お互いもう時計が止ったのではないかと何度も腕を上げては確かめる。

その間こちらはサラシ者です。

それにしても勤務時間中に多くの人がゾロゾロと所在無げに駅に集まりて、果ては「バンザイ」なんぞを三唱する。こちらにとつては精神衛生上、会社にとつても営業上あまり得策とは思えぬのに、仕事そのものよりも優先するとは——。慣例となつて文字通り慣らわしで考える対象から外されてしまったのでしょうか。

これさえ無くば左遷、都落ち何のその、勤は夫で転のみこちら、その都度世界はマツサラで、心機一転、幾つになつても未だやり直しがきくような気分になれるというものです。

遅くなりましたが夫三十六才銀行員、同じく私も三十六で、子供が二人小学生です。

十年間で地方へ二回、都内で自宅が二回変わりました。思うに私が未だ何とかやってきているのもこれに負うところがあるように思えます。

今となつてはせいぜい転勤に便乗し、でき得る限りそこを拠点に広く動き回り、自分のこの目とこの掌でベタベタ触つて確かめていくことが自分の身を軽くし、ますます動き易くしてくれる様に思えます。（東京都）

「姑」の世代より H.K.

わたしのプランを読まれた野木さんからの反論に対して、われわれ姑からの反論を書くはめとなりました。

あなたは望むと望まないとにかく変わらず、世代との相剋の中で消耗しつつ生きてゆかなければならないと嘆いています、この日進月歩の世の中ですもの、夫婦、親子の間でも考え方の相違はあるものです。新しい教育を受けられたあなたが、そんなこと、こわがらずに、賢く対処して生きていくことです。

「お嫁さん」という呼び名にこだわっていますが、夫の母を

「姑」というのと同じこと、又は、長男、長女、というのと同じ意味です。あなたが「姑が」と人に話すとき、相手はあなたの立場のすべてを知る事ができる都合のよい言葉なのです。あなたは子供のお嫁さんを何と呼びますか。

子供はつながり、そのつれあいは別と言いましたのは全く本音です。自分の息子や娘と同じように、お嫁さんや、おむこさんを扱うのは至難の芸です。違うことを承知のうえでつき合うことです。あなたは、子供のつれあいを、子供と同一に見る事ができますか。

あなたは我慢する事を罪悪だと考えているようですが、皆大なり小なり、我慢して生きているのです。男も女も。

親子水入らずの生活、こんな楽しいことはありません。しかし一人他人が加わった場合、そ

の人の立場を考え、言っではならない言葉や動作も加わるでしょう。それによって又、思いやりが出てくるものです。

せて子供が、小学校位までは、母親は家に居て、母親に言いたい事一杯持つて帰って来る幼い子供達の言う事を聞いてやって下さい。

私は一日中家に居ると言うのではなく、電気製品の普及で短縮された貴重な時間は、あなた自身のために自由に使って下さい。PTAへの参加もどれ程役に立つ事でしょう。勿論この様な事は百も承知の事と思います。

誰かに世話になる事ばかり考えているとのお叱りですが、誰かの世話にならなければ、悲しい事に一生は終えられないのです。世話になる人は、夫であるか、子供達であるか、或いは病院の看護婦さんであるかもしれません。

幸いにも路上でばったり死んでも、どなたかの世話にならなくては行けないのです。私達は喜んで世話してもらえな様にしたいと念じています。あなたは、誰の世話にもならず、人生が終えられると考えているのですか。

他人によって生きる人生は何と素晴らしい事でしょうか。自分を見失わないためにも他人とのかかわり合いは大切なものです。あなたは、おいしいお料理を作って、一人で食べて、楽しめますか。

以上があなたから頂いた問いかけに対する答です。

私達の世代はこれからの長い老後の人生をいかに生きるべきかを、一人一人真剣に考え必死に求めつづけているのです。

後からくるあなた方もどうぞ、素晴らしい老後でありますように、頑張ってください。

自然食品で作る 主婦の手作り弁当屋さん



田村緋美さん

すみれ家誕生

「好きこそものの上手なれ」

田村さんを見てみると、どうしてもこの諺が頭に浮かんでくる。

主婦の手作り弁当屋、「すみれ家」がスタートしてから三ヶ月。いつの間にか、こういう仕事をするようになってしまったこれまでのプロセスの中に、まったく一本、赤い糸で縫った運針のあとを思わせる、「一筋の道の連なりが、はつきり見える。

その道。

それはお料理が、とことん好きだということだ。

昨年の十一月、「すみれ家」はスタートした。田村さんの出したお金が百万。もう一人の友人が百万。合計二百万の資本で出資した有限会社「すみれ家」は、いわば主婦の手作りの弁当屋。その他注文に応じて、特別高級料理も各家庭に配達している。

原則として、火・水・木と週に三日働き、金曜日には、以前からやっていた会員制のメンバーの家に夕食をとどける。

弁当づくりの主要なメンバーは、田村さんともう一人。各自月給五万円也、のほろ、十一月にスタートして、五万円を手にしたのは十二月の一ヶ月分だけ。まだ赤字経営なのだ。忙しいときのパートにたのむ人たちは、やはり近所の主婦。時給三五〇円なりに食事つき。常時三人頼んでいる。

火水木に作る弁当は平均して一日三十食分。コックから運転手に早替りした田村さんが、できたてのほやほやの弁当を積みこんで、自らハンドルを握るのだから忙しい。

昼の弁当一食ぶん約五〇〇円である。夜の弁当はかなりこっている。

松花堂の弁当箱に、さしみ、煮物あえ物、口とり、揚げ物が、仕切りの中に彩りよく盛られ、値段は千五百から注文に応じて五千円まで。まったく「好きこそものの上手」なのである。

タテから見ても、ヨコから見ても、忙しい生活なのだが、その忙しさのやつれが、田村さんの顔にはかげもない。

弁当といっても豪華版

2月の献立(火、水、木)

—すみれ家398・5877—

第二週

- ミートローフ
- ポテトサラダ
- しめじとえのきの味噌煮
- 漬物

第三週

- かきフライ
- いりぶた
- 酢のもの
- 漬物

第四週

- とり肉のてんぷら
- がんもどきと野菜の煮物
- わかめとかぶの酢の物
- 漬物

第五週

- ハンバーグの中華風煮込み
- 切り干し大根のごまみそ合え
- わかさぎのマリネ
- 漬物

大盛：500円

朝九時ごろから働きだして、午前十一時半には、各家庭に配達の車のハンドルを握る田村さんだ。三十食ぶん用意するには、ふつう五人のメンバーである。

例えば昼の配達は荻窪駅前の会社に三人分、アニメーションの会社に五人分、テニススクールのコーチ用に塩分を濃くしたものの五人分。配達範囲は荻窪周辺から片道車で二十分内外のところが多いが、夜は六本木あたりまで配達することもあるからたいへんだ。

夜の用意には二時ごろから手をつける。

特別料理はいろいろだが、樋口恵子さんの家で十二月末の忘年会に注文した、大皿一盛のオードヴルを紹介してみよう。

直径五十センチほどの伊万里焼の大皿に、目もあざやかに盛りつけられた珍味の数々が十人近いお客をタンノウさせてくれたもの。

- スペアリブ（豚のアバラ骨をワインとケチャップで焼いたもの）
- ムール貝のニンニク焼き
- カニのクリームチーズよせ
- タルト（イクラやブルーチーズ、ブロッコリー等）
- ガランティーン（鳥肉を一枚に開いて挽肉とオリーブ、赤ピーマンをつめてスー

プで煮こんだもの）

- ソフトサーモン
- 天然の生帆立貝殻付



これでしめて一万円也。ホテルあたりの、半分乾きかかったようなオードヴルとはわけが違い、実においしいものであった。

金曜日の会員の夕食メニューを紹介してみよう。二月九日のぶん。会員は二十五名いる。

- 揚げ巻き（油あげを開き、ミツバとカニを巻いて揚げたもの）
- トリのマリネ
- サラダ

これで一人前六百円也。会員になると金曜の夕食は必ず配達してもらえのだから、忙

弁当といっても、そのへんのお弁当屋さんものとはわけが違う。二月の献立をみてみよう。

これは昼の献立である。

二段の重箱弁当の upper におかず、下段に炊きたてのごはんを詰める。

しい生活を送っている現代の主婦に、田村さんは本当のくつろぎと豊かさをプレゼンしている、と言ってもよいだろう。

これだけ働いて、払ってもらうお金の五割は材料費、経費は二割で利益は約三割みこんでいる。まだまだ赤字経営だ。

生まれつき好きだった道

田村さんが料理好きになったのは偶然ではない。

まず父上が食事にやかましかった。正油やみそに到るまで、気に入らないものは使わせなかった人である。

そこへもってきて、恋愛結婚した相手が無類の食通。

お料理好きの田村さんの腕に、みがきのかかるのもっともなことだった。結婚前から、東京会館のクッキングスクールに三年間通い、最上級のコースまでフランス料理をみっちり習いこんだ。

それだけでは足らなくて、個人教授を受けて中華料理も。そして近所の人たちにも教えた。

しかしお料理好きな奥さんは、どこにでもいる。田村さんがこの仕事にとびこんだのは、彼女が自分の技能に社会的な広がりを与える

きっかけをつかんだからである。

×

四年前、杉並公民館の教養講座に参加したのがこののはじまり。

講師は反公害運動で有名な東京大学の高橋暁生さん。

「子供たちは蝕まれている」

「学校給食は安全か」のテーマだった。

スーパードに美々しく並んだ食料品、手軽な食生活を享受している結果がどうなるか――。

農業の人体に及ぼす影響、さまざまな食品添加物の遺伝子とのかかわり……。

「知らない」ことの怖ろしさが身にしみて、「知った」いま、どうすれば良いかと田村さんは考えはじめた。

こどもたちが当時、幼稚園と小学校の二年生。PTAの役員をしていた田村さんは、まずさっそく、高橋暁生さんに、子どもの食事の内容についてPTAでの講演を依頼した。

この講演が最初のきっかけになった。PTAの母親たちの間に、無公害食品に対する関心がありあがって、館山の三芳村にある、無農薬野菜づくりのグループに、十名が参加することになり、月曜日の夜、産地から直送された野菜や有精卵、トリ肉等を、火曜日に会員の家に配達することになったのである。

次のきっかけは、杉並区の区民会館の講習会だった。杉並区は社会教育がさかんで、講師を開んで食事などもする。その食事で食べる弁当に、無公害の材料を使った手作りの弁当を――と田村さんが引きうけたのが、現在の「すみれ家」のはじまりだ。

何しろ、おいしい。材料がいい。

圧倒的な好評をよび、「すみれの会」と称するボランティア活動に発展した。

月二回、料理を会員の家に配達するのである。

これが三年間、つづいたのだ。

だんだん会員の数がふえ、特別の注文がふえ、自分の家の台所でさばききれなくなってきた。家庭へのしわよせも目立ちはじめた。

料理づくりの最中に、こどもたちが帰ってくる。台所は満員だ。おやつをゆつくり食べる場所もない。

料理づくりを終えて仲間が帰ったあと、散らかったダイニングキッチンの後片づけ、そのあと家族四人でとる夕食も味気ない。

もう限界にきた、という感じで、有限会社で脱皮したのが去年の十一月だったのである。

食品営業には保健所の許可がいる。

流しは二つ、トイレは専用、自宅とはつきりした境にドアがいる。

増築工事に七十二万円かった。

百食分の大小重箱、二十四万。鍋、ユニフォーム、配達用の三ドアの車。月賦の返済に当分は追われそうだ。

食品衛生の講習を八時間、二日間受け、十一月八日に開店したのである。

手づくりの線を守って

「すみれ家」の誇りは、無公害の野菜と、添加物の少ない材料にある。

牛乳は四つ葉牛乳。

正油はカギサ正油。無農薬大豆を使った、一と四七〇円の正油である。

酢は純米酢のヨコ井。

味の素などは石油のカスだから、一切使わないという。

塩は天塩、デパートなどの自然食品売場に売っている。

ソースは丸島ソース。相模原の母と子の健康を守る会で手に入れている。

会員のつてで、ホテル向け上物を扱う築地の魚市場を紹介してもらい、三年間というものの朝九時という買い出しに築地へ通っていたが、暮からは、近所の魚屋さんの好意で、ついでに荷に乗せてもらえるようになったので、ずいぶん楽になったという。

昼、夜の弁当、特別料理の注文、どれも予約制である。

原則として火・水・木だけ営業し、注文の少ない日は二、三人で、忙しい日は五人、パートの人たちをたのむ。

最近、税理士に帳簿の内容を見てもらったら、週四日だけでは経営が成立たない。商売として一本立ちするならば、もっと日数や予約数を増やさなければ、と忠告された。

大量につくれば手づくりの良さはもちろん



調理場・手前が三升炊き釜

なくなる。

日数を増やせば、本格的な仕事になってしまい、現状の、主婦のサイドビジネスという性格がなくなってくる。

おつれあいにも、姑さんにも、両親にも、まわりの人たちに相談し、同意と協力に支えられはじめた仕事なのだが、田村さんはこれ以上規模を拡げることには否定的だ。家族に迷惑をかけたくないし、もうけることよりも、無公害食品に、より多くの人たちが関心をもってもらえるような仕事をつづけていくことで、自分の老後の幸せにつながる何かをつかむことができる、と考えているからなのである。

「自然食品でつくる、主婦の仕出し弁当」田村さんは当然、この線を守っていくつもりでいる。

好きな料理をつくれるのが何より嬉しく、注文してくれた知人の顔を思い浮かべながら手を動かすという田村さん。

好きであるうえ、伝統的に女のものとされている仕事、比較的家族にもメリットがあり、自立につながり得る料理の仕事——女が一本立ちになるのは勤めに出るだけではない。田村さんのような生き方は、多くの実質的なプラス面を含んでいると言えないだろうか。

(まとめ・田中)

アンケートのまとめ

子育て期の 主婦の生活

人とのかかわりを中心に

主婦たちはいまや個性豊かに自分の生を生きているのです、と言い切る人々があります。一方では、核家族の母親たちは孤立して密室育児を行ない、情緒不安定におちいつていると指摘されたりもします。

家庭にいて幼い子供たちを育てている主婦たちは、本当のところどういう生活をしているのでしょうか。日常生活の中での人とのかわりという視角から、それをさぐってみようとしたのがこの調査です。

《アンケート項目》

- 一、一日に会って話した人々すべての顔ぶれと数。
- 二、電話や手紙で接した人々。
- 三、夫とどんな話を何分ぐらいしたか。

この項目を二週間続けて記録していただきました。寄せられた回答は四十六通。

・年令は二十五才から四十三才まで、平均三十三才。

結婚してから八・二年、結婚後十年以上の人は十一人。

一・八人の子供を持ち、最初の子の平均年令は六・二才。過半数二十四人が三才以下の子を育てています。

夫との年令差は二・九才、夫が八才上というのが一番ひらきのあるケースでした。

親と完全に同居しているのは三人だけ、スーブのさめな

い距離に別居しているような人が数人、大多数が核家族。
翻訳、牛乳配達、書道教師などのアルバイトをしているひと数人のほかは収入を伴う仕事をもたない専業主婦です。

日常生活の中で接する人々

— 顔を合わす人たち —

出会って口をきいた人の数は、二週間に平均六十一人、一日あたり四・四人でした。

内訳は図1のようになります。

「近所の人」が多いのは、まあ予想通りといえるでしょう。

「子供を通しての知人」の数は、子供の年と関係がありました。子供が大きくなるにつれて、幼稚園の送りむかえの場所であう人、父母会の出席者、先生、塾教師などとの接触が増えていきます。

「お店の人」には、集金、修理、訪問販売、銀行や役所の窓口など日常の家事を通じて会う人々が含まれています。スーパーのレジであいさつするくらいの会話は数に加えなかった人も多いので、実数はもっと多いと思います。

親元から離れている核家族が多いせい、
「親兄弟・親類」と会う機会は多くありません。半数近くは二週間を通じて全く会わずじまいでした。個人差が激しく、一番つきあいの多かった人はのべ三十九人と顔を合わせて

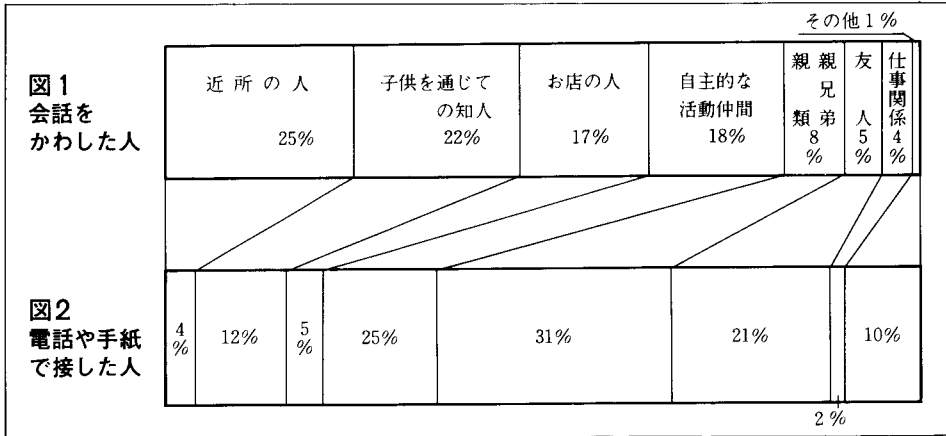


図1
会話を
かわした人

図2
電話や手紙
で接した人

います。近所に双方の一族が住んでいるのか、実母、実姉、姑、義姉、義兄、甥の何人かと毎日話している様子が記入されていました。「友人」と書かれたものは、どんなつきあいかかわりにくいです。学生時代、独身時代から続けて交際している人を友人とした例が割合多かったようです。

長電話の相手は

電話や手紙で接した人の数は、二週間に平均二十人、うち八四％が電話でした。内訳は図2の通り。

図1では合わせて一二％にすぎなかった「親兄弟・親類」と「友人」が、ここでは五二％にもなります。

母、姑、姉妹や近くの友人とは電話で連絡しあい、それが時には長話になることもあり、遠方の友人とは近況を知らせる手紙をやりとりする、といった生活がうかがわれます。

仲間を求めて

自主的に参加している活動を通じてのつきあいは、会話をかわした人のうち一八％とかなりの割合を占めていました。主婦が自分から人間関係を求めたとき、どんな場でそれが得られるのでしょうか。

回答者四十六人のうち、趣味やお稽古事関係の人と出会ったのは十五人。内容はアートフラワー、皮革工芸、陶芸、菓子作り、人形製作、コース、テニス、体操などびっくりするほど奇抜なものは見当りませんが、大変多彩です。

このグループは比較的年令が高く、子供が幼稚園や小学校へ行くようになってできた時間を利用してのものと思われまします。しかしなかには、入園前の子供を夫にまかせて日曜日に琴のお稽古に通い、その子が小学校に入學したら団地で教えるはじめようと将来計画を立てている人もいました。

公民館の婦人学級などでのつきあいのあった人、十四人。これもやや年令の高いグループです。

そして生協の仕事や子供の預けあいなど生活分野の活動にかかわった人、十三人。これは子供の年令と関係がなく、〇、一、二才児の母親が相当ふくまれています。

▽生協の卵をとりにきた人と話をする。

▽共同購入のじゃがいもを持っていつて話す。

といった記述が目立ちました。

研究会、同人誌等の仲間と会った人、五人。文化人類学セミナー、図書館関係の研究会、

主婦の問題を考える会、そして「わいふ」。奉仕活動関係者と会った人、二人。地域文庫と点訳。

この数字は限られた二週間についてだけのものです。たとえば点訳奉仕をしていても、記録をとった期間にその関係の人と会わなければ、回答に表われてきません。回答者が実際に活動に参加している率はもつと高いとみていいでしょう。もともとわいふ会員やそのサークル仲間がアンケート対象だったせいもあるのでしょうか、趣味友達や学級仲間との交際を楽しみ、生活面での協力関係をつくりあげている積極型の主婦像が浮かびあがってきます。

主婦の学歴

学歴という項目は作りませんでした、回答を通読していると「大学時代の友人」「大学の同窓会」といった言葉が随所に見つかります。語学を生かしたり、ものを書いたりなどの知的な職業についていた人も多いようです。

『婦人の現状と施策』（総理府編）によれば、現在三十一才の全女性のうち、短大・大学率は九人に一人の割合だということです。回答者が平均よりはるかに高学歴であることが推測できました。そのことも自主性、積極性と

無関係ではないのでしょうか。

しかし、こういう見方ができるかも知れません。高学歴であっても、専攻や地域が現在の生活とつながりにくい。自分の考えが問いつめられるような激しい討論の場、社会的問題意識を育てる場を持つことがむずかしい。主婦の生活にはそんな限界がつきまとうているのではないのでしょうか。

なんと狭いところで

記録をとってみて、自分の生活圏が狭いなあと感じた人が少なからずありました。小さな子の母親ほど感想も切実です。

「我ながら如何に人と話をしていないかとあきれました。ましてや子供と夫関係を抜きにした社会的接触なんて皆無なのです」(五才、一才児の母親)

「なんて狭いところで生きているのか、改めてびっくりしたりがっかりしたりしています。子供が行動範囲を広げるのについて歩いてすこし友人もできましたが、もう子供は一人でその範囲を広げだしました。考えてしまいます」(六才、二才児)

「つっこんだ話し合いなどもほとんどなく、社会的な接触もありありません」(四才、二才児)

「私がふだん話をする機会があるのは、同じアパートの人々、それと子供が幼稚園に行くようになってからそのお母さん達ばかりで……」(四才、一才児)

二人目が小さくて多忙にもかかわらず、アルバイトや奉仕活動など家庭以外の生活も持っている人たちなのに、閉塞感、社会的接触への飢餓感はなくなっています。

窓をあけるために

行政のあり方が、乳幼児の母親にとって一つの救いになっている例もありました。

「T市の公民館の保育室は、改善する余地はあるけれども、今の私にとっては独りになれる場所です」

「N区は幼児グループや集団保育を三才児を対象に実施しているので、利用して助かっている」

乳幼児を連れた母親に無理解な応対に出会う場合もあります。

「(児童館で)次男が寝てしまったので、先にマットに寝かせて入館カードを出しにきたら、係の人にカードを先に出すように言われた。事情を知って何でそんなことを言うんだろうと少しムッとしたので、私も言い返す」(五才、四才、一才児)

外に出るため、友人とのつきあいを続けるため、さまざまな工夫がなされています。

「私はラッキーだと思っているのですが、故郷の友が四人ほど近くに住んでいて、電話したり、時には訪ね合ったりしています。近

所の人達だけのつきあいでは、どうも直接的になりすぎてよくない思っているのです、これらの友とのつきあいはクッションの役目を果しているようです」(五才、二才児)

「私自身が外に出たい時は、主人に子供を頼んだり、近くにある短大の保育課の学生にベビーシッターを頼んだりしている。

月に一度の勉強会(読書会)——大学時代の友人十人程と月一度本を決めて、レポーターが報告。真面目に話すこともあれば、子供のことなどを中心とした雑談になったりいろいろあるが、もう八、九年続いている。

同窓ノート——やはり四人の友人と、ノートを回しあって近況を書いたり子供のことでの悩みやら考えを交換し合っている」(三才、二才、〇才児)

「友人(学生時代の)とはノートをまわし合っています。都下に何人かと他県に何人かです」(六才、二才児)

友人から友人へと郵送される一冊のノート。独身時代の仲良しグループも離れ離れになり、

みんな子育てに追われていて、一堂に会することができなくなっています。近況を知らせ、考えを交流しあうために、こんな知恵がみ出されているのです。

転居が奪うもの？

また、「転勤、転勤でせっかくできた親しいお友達とも離れ離れになり、少し寂しく思っています」という感想がありました。

この人にかぎらず、回答者は実によく引越しています。結婚して平均八年しかたっていないのに、もう二、三カ所めの住まいにいるのです。結婚以来一カ所にとどまっている人は十一人(二四%)しかいません。夫の転勤のほかに、子供ができたから、団地が当たったからと転居を重ねるのが普通なのでしょう。

当事者にとって転居は、人間関係を切断し、自分の生活を築くのをさまたげる元凶、大きなハンディと感じられるのは当然です。

ところが回答者からは転居しない人々が転居族と違った生活をしている様子があまり読みとれなかったのです。転居は、主婦の生活を規定するさまざまな要因のうちの一つで、決してすべてではないようです。

男性不在の生活

回答の中から、もう一つ大きな問題が出てきました。夫以外の男性とのつきあいがゼロに近いことです。

店主さんや近所の御主人、子供の先生や親類の男性などと言葉をかわす機会は多々あります。しかしどれも「どこそこの奥さん」とか「太郎くんママ」「兄貴の嫁さん」として自分を見ている人ばかり、自由に語りあったり、一つの仕事にとりくんだりする仲間や友人ではありません。

夫以外に男性の話し相手をもっている人はごく少数でした。自動車教習所で男女まじえたおしゃべりグループができたという人。翻訳の仕事上、編集者の男性と話し合っている人。職業人中心の研究会で男性と討論する人。感想の中にも、男性とのつきあいの稀薄さが指摘されていました。

「主人以外の男性と口を聞くのは御用聞きぐらいのもの、男性の意見を知るのは活字を通してのみで、これも異常なことだと思えます」

「クリーニング屋さんとか集金人をのぞいて、夫以外の男性との接触は皆無ですね。世の中には男と女しかいないのにこれはとても

不自然なことに思われます」

「(妹の夫、夫の同僚などの男性にとつて)私は一般的な主婦像以外のものではありませんから、私から何も聞き出す値打ちはないと思っているようである。……この頃学生時代の友人が夫婦で会っても男同士、女同士とわかれてしまう」

「男性の友がもてるような現実になれば、もっと広い目があるのではないだろうか」

ここに出てくるのは、女性とだけつきあう生活は不自然で異常なのだという感覚です。風通しのよい男女関係を経験してきた戦後の共学世代の意識なのでしょう。

男性ばかりの軍隊の中に歪みが生じがちなように、女性だけでつくる社会にも、健全に発展していく何かがあるのではと考えさせられます。

夫との対話

さて、主婦が堂々と話し合える男性は夫だけであることが判明しました。その夫とはどんなつきあいをしているのでしょうか。

夫との会話に費した時間は、平均一日三十八分。ただし、食事をしながら断続的に話したというようなとき、食事時間を全部加算し

て記入した例がいくつかあるので、実質的には三十分を切っています。一番よく話した人は二時間四十分、最も短かった人は六分でした。

ここでは話題も記入していただきました。

夫婦間の話というものは、あちらからこちらへと飛びうつるものですから、記録するのが大変だったと思われます。まとめる側としても、多種多様な書き方を前にして思わすうなつてしまいました。細部にこだわらずエッセイとばかりに分析してみました。

図3が夫との話題ベストテンです。

家事育児を夫に報告

家事と子供の話題が半分以上です。

①の家事の話というのは、妻がその日一日のできごとを報告し、夫はフムフムとうなずいている、あるいは二人で事務的に打合せしているというのが多いようです。

例▽部屋の配置がえのこと

▽飼犬のことで近所から苦情をもちこまれた話

▽お中元のこと

▽本日の買物の話

▽預金について報告

▽出張先からの帰宅時間の連絡法について

とかくサラリと流れがちな話題ですが、たった一つ熱心に話しこむ問題がありました。一番大きな買物——マンションや家を買うべきかどうか、二時間、四時間と話し合いが続きます。

②もまた、妻が夫に子供の様子を報告するのが大部分です。

▽子供の拾ってきた子猫のこと

▽子供の病気のこと

▽子供の見るテレビ番組について

▽運動会での子供の様子について

▽子供の宿題のこと

我が家のしつけはどうあるべきか、子供の将来はどうなるかとつつこんだ話し合いになるケースもありました。

ドラマ『夫婦』の 危機は避けられるか？

子供が巣立ったあと、向老期の夫婦の間には共感しあうものが何もなく——これがテレビドラマ『夫婦』のテーマでした。このドラマが評判になっていたころ、ある評論家は、若いうちから夫婦の間に精神的共有財産を育てねばと語っていました。

このアンケート回答者の生活は、まさにそ

の「若いうち」にあたります。二人の間に精神的なきずながら築かれつつあるでしょうか。すでにコミュニケーション不在の兆候を感じている妻もいます。

「夜遅く帰宅する主人と話をする時間もなくて、ほとんどがメシフロの類でした。もともと話し好きでない主人ですので、話の内容が書かれている部分も私が話すのみの一方通行です。」

「はずかしい話ですが、私は主人とよく言い争いをし、といってもほとんど主人が大声で（少し異常ではないかと妻の私が思うほど）どなるので……」

あとの方の夫の場合、二週間に四回、通算七十五分間もどなり通っていました。いわく、妻の行動がおそい、子供の育て方が悪い、では、帰宅時間と明日の予定をどなるといふ不可解なものでありました。さぞやのどが疲れることでしょう。どなられる側の心の疲れはもっと気にかかります。

夫婦が自由に話し合える土壌、共通の関心を持った世界はつくられているかどうか、回答の中からその芽生えをさぐってみました。

話題の火種はどこに

共通の趣味をもっている夫婦もあります。

▽夫がギターをひいて二人で歌を歌う

▽音楽について話し、一緒に歌を歌う

▽共通の趣味である推理小説の話を

これらはみな夫婦とも三十才前後の若い人たちでした。

テレビや新聞(⑤)は、夫婦への話題提供係をとめています。昨年十月に記録をとった家庭では、申し合わせたように日立市の女子中学生誘拐殺人事件が話題になっていました。他に

▽NHKテレビ少女売春について

▽隣市で発生したコレラについて

▽テレビでやっていたエリザベス・サンダースホームの番組について

内容によっては夫が教師になります。

▽中国の番組を見て、中国について話し合うというより教えられた感じ。

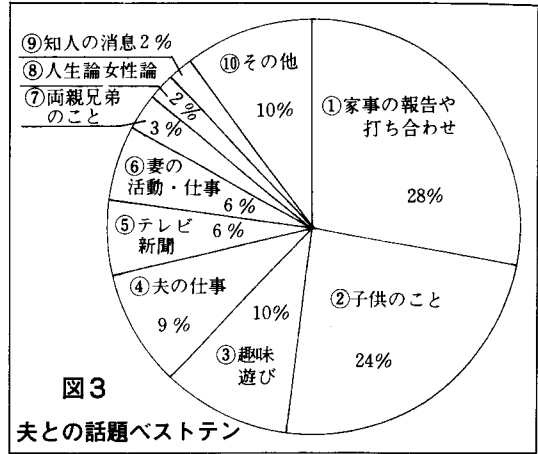
▽テレビを見ながら、特派員などのジャーナリストが共産圏や自由圏など自由に行

ったり来たりするのは範囲があるという

ことを教えられながら話し合った。

話題ベストテンの⑥に妻の活動、仕事についてという項目があります。

▽共同保育について報告



▽私が訳した原稿を読んでもらう（翻訳アルバイト）

▽盲人の方への声の広報の話（点訳奉仕）
妻が家庭の外に持っている世界のできごととに耳をかたむける男たちが四分の一ほどにいることは、一つの明るい材料でした。

きっかけがあることに、男女関係のあり方女性の生き方を意図的に夫に話し、啓蒙している妻の姿が目立ちました。これは⑩人生論・女性論に入ります。

生き方を語る妻に、いつも反応が返ってく

るとは限りません。

▽今、現在の生活でいいのだろうかなど、私が一方的に話した。

そのとき偶然疲れていて話に乗れなかっただけなのか、それともそんな話に興味を持てないのか、夫の方に質問してみたいものです。

夫は社会人？会社人？

一方、夫が外での生活を妻に語るとき、それは会社のことには終始しがちです。子供の野球コーチをしている人が一人見つかりましたが、夫の「活動」という項目を作ることにはできませんでした。

▽昇級試験に合格した話

▽新入女子社員に対してどのような話をしたらよいか

▽会社の部下について

▽会社の営業面と人事について

そのうえ、夫の趣味はゴルフが多く、プライベートなはずの娯楽も仕事上の人間関係の中心と同じこめられている様子です。

会社という所は人使いが荒いものですから、本人の責任だとばかりはいえません。しかし、会社と離れたところに討論の場やおしゃべり仲間をもたなければ、会社を客観視するのがむずかしくなり自分の精神世界を守れないの

ではないか、会社の外の人間の生き方に共感する力がなくなりはしないかと不安になります。

夫が話し好きでも

こんな感想がありました。

「夫はメシフロネル型ではありません。新聞やテレビのニュース、読んでいる本のこと、子供のことで留守中にあつたことを話したり聞いたりするほうです。私は夕食の片づけが終わると風呂といそがしくて疲れ、口などききたくもないことが多く、ついブツキラ棒なことを言って『お前がそのつもりならそれでいい!!』と言われることになりました」

これを読んで、あ、私にも覚えがあると感じた人が多いのではないだろうか。妻の方は家事を一段落させねばゆつくりする気持ちになれないのに、夫はそんな事情におかまいなく妻とのくつろぎの時間を欲しがるといふ現象はどここの家にもありそうです。

口も体も動かす夫

ここで夫婦の対話時間最長記録をつくった家庭に登場していただきます。この夫婦、二週間に三十七時間と二十分、一日あたり二時間四十分も話をしているのです。夫も妻も

二十九才、子供は五才と三才。妻は陶芸と体操の会、主婦問題の会、共同購入活動をこなしている活動的なひと。

夫婦して音楽を楽しみながら、飲みながら、いつもおしゃべりしています。映画について、女性はお化粧すべきかについて、人口増加やエネルギー問題、ワインのことやハイト・レポートと、とめどなく話しつづけていられるのは、よほど仲良しで話し好きな二人なのでしょう。

でもそれだけではなさそうです。

▽夕食後、夫が片づけをし、私はいものあめだきをつくりながら四十分雑談。

▽（休日の朝）どっちが先に起きるか、ふとんの中で相談、三十分。

かたづけものは妻の仕事、妻が早く起きてあたりまえの夫婦なら、こういう話の機会は持てないはず。この家を訪れた客は、夫の方が洗いのをしたりお茶をいれたりしているのを見て驚き心底感心したとのこと。口だけでなく手も足も動かす夫であることが、カギになっているという気がしました。

フルタイムの共働きでも家事協力をしづるのがこの国の夫族の特徴です。まして妻が職業を持たない場合、家庭の中の仕事は完全に妻の領分とされがちです。でも、夫はちゃん

と自分の休息の時間を確保し、妻には、とてもなくわきおこる仕事の合間の待機時間しかないとしたら、この二人に対等の話し合いが成り立つでしょうか。

妻が行動しはじめたとき

夫の家事協力に関連して、トラブルを起こした例が二つありました。

——妻が日曜日に病気の兄のところへ行きたいと言ったら、夫は大げさにびつくりし、せっかくの日曜なのになあといつまでも留守番をするふんざりがつかない。三人の子供のうち一人を妻が連れていくことでOKがでる。日曜の夜はいつもと反対に、夫が子供の一日の様子をあれこれと報告。

——平日夕方からの会合に子供を連れて、あるいは夫にまかせてよく出かけている妻の場合。ある日、帰りがいつもよりおそく、電話連絡をしなかったため夫が怒ります。

これをきっかけに三日間、けんかしながらそれぞれのやりたいことを出し合い、家事のけじめをどのようにすれば双方が満足するかなどを話し合う。

妻が自分にとって必要な行動をとりはじめたとき、家事協力が生まれ、話題が情性から

抜け出す可能性が生まれるのかも知れません。

そしてエロス

これは主婦対象のアンケートなので統計には加えませんでした。が、中学の英語教師をしている女性が、夫との二週間の生活を記録して送っていただきました。六才と二才の子がいて、夫も同じく英語の先生です。

「買物をして家にたどりつくつと六時頃ですが、すでにその頃は夫が子供二人をひきとって帰っており、洗濯の真最中です。……子供を寝かしつけるのは夫の役目で、二人を風呂に入れてそのあとすぐ三人で枕を並べて寝ます。……夫婦二人でのんびりできるのは十時半頃からで、このころやっと落ちついて話をする気になります。時には夫が子供二人と寝込んでしまうこともあります。それ以外は二人で飲んで話をしています。興がのるとすぐ二時近くなつてしまい、あわてて寢床に入りこんだりします。

「私達は常にふざけあつてくだらないバカ話で時間をつぶしているが、全くよく笑う。会話をちよつとずつひねって、相手が投げたよこした意図をひとひねりして投げ返した時には全く痛快である。会話のおもしろさは、

あるいは知的ゲームの面白さと考えてもよい。私達が話すことは全くとりとめもなく、学校の話から新築の家の話、台所のゴキブリとか風呂の掃除の話に、金のない話から人生論……

この夫婦は睡眠を減らしても話し続けていたい様子です。

夫は多忙で帰宅が遅いから、男というものは無口だから、夫とほとんど話ができないと多くの主婦は言います。日常の中では確かにその通りだと思いますが、人間関係は、互いに引き合うものが不断に生まれるような共同性の中に生きていくかどうかが根本にあるのではないのでしょうか。それがあれば、多忙なら多忙なりに、無口なら無口なりにコミュニケーションを持とうとするはずです。条件の悪さや生来の性格に責任をおしつけ、夫との人間関係の空洞化から目をそらせようとしてしまう弱さを私達は持っていないかと、ギリとさせられます。

ところでこの夫は、どういう思想の持ち主でしょうか。

「夫には『女だから』といった差別的意識が全くないのかどうか、今までに『女のくせに』とか『女は』とか、あるいは長女に『女の子だから』といったようなことも一言も口にしないのが不思議なところである」

「子供が病気をすれば、我が家は核家族なので二人のうちどちらかが休まなければなら

ないが、割合からすると夫の方が多く休んでいる。……夫の口ぐせは『仕事より家庭だ』であり『仕事、仕事と言う奴は偽善者だ』

である。夫の生き方は一般的には軽べつの眼で見られるものであるかも知れないが、私は夫の人間らしさを強く支持している。……仕事オンリーで定年と同時にボケてきて、家族との交流もなく生きた屍となっていくエリート達こそ一体何のための人生なのだと思いたい」

この記録から、もっと深い問題も読みとれます。

「教師は授業で勝負すべし」を主義とする彼女は、研究授業の前日、夫と二人で教案をひろげて検討し、「しつかりがんばれ」と激励をうけます。当日帰宅すると夫が開口一番、「どうだった?」と聞き、成功のお祝いに二人で飲み始め、やがて夫が寢床から呼ぶという光景が活写されていました。

ふだんはあまり考えずにすませがちですが、私達は、本当に人間的共感にもとづいた性を享受しているのでしょうか。この二人の生活は、それをも問いかけているように思えました。

結論は出ないけど

子育て中の主婦から寄せられたナマの生活記録は、一通一通がずっしりとした事実の重みを持っていました。

これをまとめて割り切った結論を出すことなどできそうにもありません。けれど、あられかたこそちがえ、一人一人が同じ壁の前でなやみ、似かよった苦痛を味わっているのだということがわかりました。努力や工夫が足りないというよりは、主婦の置かれている社会的位置づけから生じる問題だと言えないでしょうか。

やる気さえあれば、たちまち「翔んでる女」になれるなどというのは、やはり現実を無視した浅薄な思考でしかないようです。

この調査のために、面倒な記録作業をしてくださった皆さんに心からお礼を申し上げます。一人一人が自分の考えを見つめるとき、新たな角度から光をあてるのに役立てばと願っています。

(まとめ鈴木由美子)

柏サークル 誕生

昨年十一月十五日午後、柏市中央公民館で、千葉県北部を中心とした「わいふ」の地域読者会が開かれました。柏市をはじめ、松戸、鎌ヶ谷、市川、佐倉その他の地域から十六名の読者が集まり、編集部から田中、和田、林さんがおそろいで出席されました。参加者のほとんどは、乳幼児づれの若いお母さんがたで、おとなと同じか、それを上回る数の子供たちが、かん声をあげて走りまわる中での話し合いでしたが、熱のこもった発言が続ぎ、あつという間に三時間が過ぎました。

まずめいめいが「わいふ」に参加した動機や、読後感などから話が始まりましたが、「わいふはしんどい」という声が続出。そのしんどさは、投稿の中には大変うまい文章が多いので気おくれがしてしまつて、ということもあるのですが、主婦が毎日の一

見平穏な生活の中で無意識に目をそむけてきているものに、いやおうなしに直面させられるしんどさのようです。しかし、しんどいながらも、これからもそういう主婦の肉声、本音を、大切にしていきたい、きれいごとの作文には終わらせたくないという点で、編集部も読者も一致していました。もっとも編集部としては、もう少しあそびやゆとりをとり入れ、内容に広がりをもたせたいと思っているそうですが、読者からの「しんどい」投稿は増える一方、さりとて増ページはまだ経済的にむずかしいというのが現状だとか。

「わいふ」は観念的な議論の場合のか、それとも何らかの行動の拠点なのかという疑問が出されましたが、そもそも十六年前の「わいふ」創刊のきっかけは、宝塚市の保育所増設運動だったということです。けれども編集部が音頭をとって何かをするというのではなく、「わいふ」を通じてできたグループが、その地域での福祉や消費運動などに主体的にかかわっていくということが、これからの、たいへん望ましい動きだといえるでしょう。

長くPTA問題にたずさわっておられる方から、「わいふ」にみられるような主婦の意識の高まりがもっと教育運動と結びついていいのではないかとという問題提起がなされ、話題は教育問題へ。性教育をはじめとして学校教育に根強く残っている男女差別や、君が代、日の丸問題など、話は広がっていきしましたが、おしくも時間切れとなりました。「今の子どもは無気力だといわれ、私たちもよくそのように言うけれど、考えてみれば自分たち親だって無気力ではないか」という発言が、印象的でした。

最近この地域では、「フープ」(読売新聞の地域配布パンフレット)を通じて「わいふ」への呼びかけを行ない新しい参加者が増え、このような会合が開かれる運びとなつたわけですね。席上ぜひこのような集まりを定期的にもちたいという声が多かつたので、三月下旬、柏市中央公民館で、第二回目を開く予定となりました。ご参加をお待ちしています。

日時、公民館への道順などについては、鈴木由美子 ☎〇四七四(四五)六八二四・四方愛子 ☎〇四七一(七四)七三七七へ。

離婚のしかた 教えます

— その 1 —



わたしたちは先入観を捨ててみるべきではないだろうか？ 結婚は幸福であり離婚は不幸であるという先入観を。

そしてわたしたちの結婚の実態がどういふものであるかを直視してみよう。離婚という視点は、結婚そのものの意味を深く解きあかしてくれるであろう。

和田好子

離婚分科会

「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」という、たいそう長い名前の団体がある。

女性差別に反対し、差別をなくすために行動するというこの会は、主婦分科会、教育分科会、労働分科会など、いくつかの分科会に分れているが、その一つに「離婚分科会」がある。

離婚分科会がこれまでとり組んできたのは、「離婚の母の家」をつくることであつた。

世の中には暴力亭主というものがあつて、妻君や子どもにひどいことをする、耐え切れず離婚しようにも、金はなし職はなし、身を寄せる先もない。うっかり飛び出せば追つかけてこられて暴行され、連れもどされるおそれがある。そういう切端つまつた場合に、幼い子をかかえてかけ込める施設、夫に見つけられても守ってもらえ、しばらく保護を受けて職を探したり子供を預ける手だても考えられる場所、それが「離婚の母の家」である。

そういう施設を作ろうというので、一九七五年の結成以来運動を続け、昨年ようやく東京都では開設の運びとなつた。

次の活動としては、「離婚は怖くない」(仮題)という本を、みんなで書くということになっている。

活動報告には、

「いま私たちの分科会で考えている運動は、自由な離婚、男女平等の離婚を世の中にアピールしていくのではないかとのことです」とある。「母の家」の運動は、止むを得ざる離婚をとり扱ったわけだが、今回は一歩を進めて、「自由意志による離婚」「女が差別されない離婚」と取り組もうというわけである。

新宿にある中島通子法律事務所を借りて、開かれた月例会を傍聴し、みなさんで書くという本のために、集めたアンケートを見せてもらうことができた。

アンケートは、①離婚して独身でいる人、②離婚して再婚した人、③別居中、または離婚問題が起きてモメている人、と対象が三つに分れているが、そのうち①を抜き書きしてきたので、ご紹介してみよう。

Aさん(三十九才)の場合
問・離婚後の感想は?

とてもすばらしい。セイセイした。

問・異性の友人はいますか?

いない。欲しくない、このままでよい。
問・今一ばん悩んでいることは?
子供の進学。

Dさん(二十九才)の場合

問・離婚後一ばん困ったことは?
職がなくて困った。

問・今一ばん悩んでいることは?

セックス。子供にとつて、やはり父親は必要ではないかということ。

このDさんは結婚歴四年、離婚後たった三日め、幼い子を一人かかえている。セックスに悩んでいるといいながら、異性の友は?の問いに、いない、二度とイヤ、と答えている(離婚後三日目といっても別居が長い)

Cさん(五十一才)の場合

結婚歴二十年、離婚後九年、二人の子供ももう大人だし、五五〇万円ほど慰謝料をとつて出たうえ、家も職もあるためだろう、なかなか積極的である。

問・離婚を考えた時、何が怖かったですか?

怖いぐらいなら離婚しません。喜んで印を押しました。

問・離婚の感想は?

自由を得てほんとうにすーとした。独身

に返り咲いて人生へのリターン・マッチに挑戦中。すばらしい毎日です。

問・異性の友人は?

よき話し相手はいます。しかし友人関係でよい。再婚など考えない。

問・あなたの現在の職業は?

ブティック勤務。月収十五万円前後。

問・今一ばん悩んでいることは?

何もない。大へんゆかいである。

中には病身のため離婚され(自分も承知したには違いないが)、子供は育てられないから夫に渡し、病苦と生活難と、孤独に悩んでいるという気の毒なものも一例あったが、離婚の感想はほとんどが申し合わせたように「セイセイした」というところに○をつけ、さらに「生き返った」とか、「すばらしい」とか、書き加えているのが目立つ。

次に印象的なのは、相手の男の払いのわるいことで、財産分与、慰謝料ともに一文もなく、幼い子に養育費も送らぬというひどい奴が一人二人ではない。女のほうも、そんなものをもらうと縁が切れないから、断わったという人もあり、あまり恨んだり怒ったりしてないようにみえる。離婚してセイセイした、すばらしい、というくらいであるから、とに

かく結婚生活そのものが耐え難く、ゼニカネなんかどうでもよろしい、という感じなのであろう。

その裏には、女房にいやがらせの限りをつくし、タダで追い返そうという卑しい男の顔が、想像されなくてもないのだが……。

結婚生活十年未満で別れた人がもつとも多く、だいたい五年〜十五年の間に集中している。

「離婚を考えたとき何が怖かったか」の問いに対して、「子供の問題」がもつとも多く、ついで「経済的に自立できないこと」があり、「精神的に不安」というのもずいぶんあった。また「このくやしきから解放されるかどうか、分らないということ」をあげた人もかなりいる。おそらく夫の異性問題が原因となつて、離婚した人たちであらう。

「家業を夫がやっていたので、出ていかれたらあとどうなるか、それが怖かった」と書き込んでいる人もいた。

離婚の原因はどんなものだろうか？ 左にあげてみよう。

- ①、性格・性の不一致 25
- ②、異性問題（相手の） 18

- ③、経済問題（相手の） 10

- ④、嫁・姑の不仲 6

- ⑤、暴力（相手の） 5

- ⑥、その他 6

性格と性の不一致を一しよにするのは、わたしには少しふしぎに思われるけれども、夫婦というのは、やはり本質は男と女の関係であるから、性の不一致が直ちに性格の不一致に重なってしまうということであらうか。裏返していえば、性格の不一致があつても、性の一致があればおさまってしまうのかもしれない。

分科会がはじまる前の雑談中、わたしの側でこんなことをしゃべっている人がいた。

「妻が母親であり家事担当者であるというだけで、女であることを忘れてしまった場合です、離婚というのはね。わたしはそう思うわね。家政婦でしかないなんて、歎く人、自分で家政婦になつちやっているのよ。女であることを忘れて……男っているのは、何才になつても女を求める、女よりずっとロマンチストだからね。妻に家政婦であることしか求めないとすれば、それはほかに女を求めるちやっているのよ。だから愛情という面を強く出さないと、結婚生活っていうのはわたしはダメだと思うよ」

いろいろ聞いてみると、この人はどうやら一度離婚したが再婚で成功したという経歴であるらしかった。

現在の結婚制度では、ともすると夫と妻が互いの生活の便宜のために、共同生活をするという形になりがちで、男女の関係を忘れる場合が少くない。離婚の原因として性格・性の不一致が一ばん多いのも、そのあらわれと思われる。

子供は母のもの？

アンケートでいま一つ目立つのは、例外なく子供は母親がひきとっていることだ。

・たしかに、ごく小さい子では父親の手に余り、母親も置いて出ようにも出られまいが、小学生はもとより、中・高校生ぐらいでも母について出ている。

わずかに父親を親権者（名ばかりの）にしている例が一つ二つあるのみである。

離婚すれば、どうせ男は再婚するのだから、子供がいらないほうが相手を捕まえるのに便利ということはあるだろう。

女は離婚にさいして「子供のことが一ばん心配」だといっているくらいだから、とてもかわいそうで残して出られない気持ちが強い。

男は離婚となったら、子供もろとも消え失せて欲しく、新しい女房にさつきと関心が移り、女は子供がかわいくてあわれで、ひしと抱きしめて家を去る。アンケートにはそうしたありさまがまざまざと表われているのである。

そして男は金もあり払わない。

養育費を、一人の子供に月十万円とついているのが一例あるが、これは夫の家が旧家で、子供（七才）はその跡つぎであり、親権も母親には渡してくれないという事情があって、いわば男が権利の主張のために払っているのである。こんなのは例外で、たいてい月一、二万程度、それも「だまっている」と送ってくれない。家裁を通じて言つてやるとようやくよこす」などというのがある。

「はじめはよこしましたが、今は送つてこない。面倒なのでそのままにしてある」とか、なにしろ男は逃げほうだいなのだ。

子どもを、女一人でつくるができないのは自明の理で、必ず父親があるにきまつている。

それなのにアンケートで見るかぎりでは、子供には母親しかいないみたいに養育の責任はすべて母親にかかっている。

だいぶ前の話であるが、大阪の近くで、仲

の悪い夫婦があり、経済的にも行き詰つたため、まず妻が二才と一才の赤ん坊にひとしい子を置き去りにして家を出てしまい、父親もまた同じことをやった。双方、相手が面倒をみるだろうと思つていたというのであるが、何日も放置された二人の幼児は、締め切つた家の中で餓死したという事件があつた。台所にナマのカボチャが一つあり、上の子はそれにかみついて歯型をつけていたが、食べることができずに死んだのである。

当時わたしは大阪にいて、新聞記者の奥さんと親しくしていた。その人の話によると、取材に行つた記者がいく晩もうなされてしまったという。

子供の死体はせんべいのように薄くなつていて、その顔は人間のものではなかつた。記者は「これがお化けつもののだ」と思い、「目の前にちらつて眠れない」と訴えていたそうだ。

こういうひどい母親は、おそらく稀であらうが、父親のほうは、ずいぶんそのくらいのこととはやりそうにアンケートからは感じられる。

もう一つ、「妻が母親であり家事担当者であるというだけで、女であることを忘れてしまった場合ですよ、離婚というの」という、

さつきの人の言葉をカギに使つてみると、妻であるよりもまず母である女の姿が浮びあがつてくる。

夫としつくりいかず、いつも子供に関心がいつている妻、いや、夫が妻と子をひとまとめにして「家庭」に置きざりにしているために、母でしかあり得ない妻だろうか。

そうして、多くの離婚した女は、子供のために苦しみ悩んでいる。

「子供が小さいときには、置いて勤めに出なければならぬのが何より辛かつた。病気のときは非常に困つた。今大きくなつた子供にきいてみると、いつも枕元にお菓子があり、本を読んでいたの、ちつともさびしくはなかつたと言いますが、母親としては悲しかつた。出かけるとき身を切られるようでした。あちこちに預け、いろいろな人に助けていたでいて、やつと切り抜けてはきましたが……」
こういう悲しいことを書いている人も、「離婚の感想」は、「すばらしい」と答えている。

妻の価値

よく、妻は家庭で家事・育児を担当して、夫と子供を支え、間接に社会の役にも立っているのだから、夫と対等である、という人が

ある。また、「妻は家庭の中心であり、太陽である。すばらしいものを家族に与えているのだから、働いてお金をとってこなくとも、十分に価値がある。お金では買えない、尊い役割なのだ」などとも主張される。

しかしひとたび夫婦の問題がうまくいかなくなると、たちまちその価値は消え失せる。夫を支えていればこそ、価値があるのだから、その夫が他の女のところへでも行ってしまう、残された妻は無価値になる道理である。そしていよいよ離婚となれば、財産分与はおどろくほど少ない。

アンケートの「離婚して独身でいる」例は四一であるが、そのうち財産分与があつたのはたつた一〇例、あとの三二例は取らずに別れているのだ。

もつとも別に慰謝料というのがあるのだが、これも「あつた」一三、「なかつた」二七、無答一、となつている。

財産分与と慰謝料と、両方とつた人もいるが、どっちも取れなかつた人のほうが多い。

金額は、財産分与の場合、(かなり年数が経っている例もあるが) 少ない順にあげると、四十五万、七〇万、一五〇万、四〇〇万、五〇〇万、一三〇〇万(土地・家屋)、三〇〇〇万(土地・家屋)。男が養子だったので、女のほ

うから出したというのも一例ある。

次に慰謝料だが、これも少ない順に、三十五万、五〇万、八〇万、一〇〇万、三〇〇万、四〇〇万、五五〇万(結婚中共働き)というのが最高である。

前に述べたように、離婚までの結婚年数は五年〜十五年であるが、それだけの年月の妻の働きは、最高の場合でも夫の一年分の収入くらいに踏まれており、共働きが有利であるのは、家事労働の価値の低さを裏書きしているように思われる。土地・家屋をもらうと、当節は価格が高いからたいしたもののようにだが、それは住んでいる家なのであり、住んでいる以上簡単に売りとばすわけにもいくまいし、不動産というものは、ハシからかじって食べることもできないのであるから、じつは家賃を出してもらっている程度のことなのだ。それでもイザというときは売れるのが取柄で、それを頼りに当面の、自活の道を探している女の姿が目に見える。

このように、財産分与なり慰謝料なりで、自分のこれからの生活の経済的基盤をもつて離婚できる人は非常に少ないのである。

たいていは荒廃した夫婦仲の苦しさに耐えかね、無一物でとび出して「セイセイした」ということのようにだ。

わたしたち妻は、毎日家事労働をして夫のため子供のために働いているが、それはいたい意味があるのだろうか？ 意味があるようにみえるのは、夫が妻を裏切らない間だけではないだろうか？

わたしはアンケートを抜き書きしつつ、妻の立場のはかなさに情なくなつてしまつたが、それをさらに裏書きするように、側でこんなことをしゃべっている人がいた。

「わたしなんかぜんぜん分らなかつたわよ。分つていれば何か取れたはずだけど、分つたときはすでにおそしよ。離婚後三年もたつて分つたつて、異議申し立てはもうできないのよね」

夫に異性関係があつて、それが原因の離婚ならば、出るところへ出ても財産分与も慰謝料もとれたのに、知らずに協議離婚をしてしまい、三年たつて分つたが、異議申し立てのできる期間はすでに過ぎていたというのである。

男というものは、なんと有利な離婚ができるのだらう！

結婚中の妻の価値は、このように夫からも社会からも、低くしか認められないのであるが、では離婚して働きだしたら、彼女の価値はどう変動するであろうか。

「離婚独身」の人たちは、当然のことだがほとんど全部が職業をもって働いている。病気で働けない人が一人いるだけだ。

彼女らの収入は、月額五万〜一〇万にマルをつけている人がもつとも多く、ついで一〇〜一五万、一五万以上となるとほんの少数だ。これでは子供を抱えてよほど苦しかろうと思うが、少しは別途の収入をもっている場合もかなりある。わずかながら養育費を仕送りさせていたり、分与された財産で補っていたり、実家の援助、自分が相続した財産、等である。

もちろんそれは恵まれた人たちで、自分の収入だけで食べている人が半数の二二人に及んでいる。さらに生活保護という人もいる。とにかく何とかかんとかやりくりしている感じで、「家庭」を出ても価値が上昇するわけではないようだ。いや、やはり上昇というベキかしら？ 無収入であった主婦が、一〇万〜一五万を得ているのだとすれば……。

一般の通念として、離婚は人生の失敗であり、大きな不幸だと思われる。

このアンケートに表われているのも、性格の不一致や夫の異性関係に悩み、離婚を決意したものの、財産はあまり分与されず慰謝料はろくに取れず、養育費も危いのの子供を抱え、

低い収入で世の荒波を泳ぎ渡らなければならぬ、不幸といえど不幸な女の姿である。

それなのになぜ、大部分が離婚の感想としてセイセイしたとか、素晴しいとか、よかったとか、自由を得てすーっとした、などと喜んでい

るのだろうか。離婚しなければよかったと後悔しているのはほんとに一人もないのである。異性の友人を得ている人は少ないが、まれに

得ている場合「友人関係でよい」という答が多く、「再婚したい」のは一人しかいなかった。「もうこりこり」と書き込んでいる人もある。

結婚生活のまった中にと、こんなものだと思つて暮しているが、離婚して外側から眺めたとき、意外に結婚なんてつまらないものなのかもしれない。

わたしたちは先入観を捨ててみるべきではないだろうか？ 結婚は幸福であり離婚は不幸であるという先入観を。

そして私たちの結婚の実態がどういうものであるかを直視してみよう。離婚という視点は、結婚そのものの意味を深く解きあかしてくるだろう。

そしてただただ結婚にしがみつけばかりでなく、より充実した一回きりの人生を送るために、もし離婚をプログラムに組み入れる必要があるなら、ためらわずそうすべきだと思う。

▼先号でおねがひした乳幼児の事故の調査、いろいろなかたから投稿をいただきましたがいずれも投稿形式で、短いものが少ないのです。

編集部としては、できるだけ多くの事故のパターンを集めたく思っておりますので、本当にハガキに走りがきでもよろしいのです。ぜひ、ご経験をお伝え下さい。

▼急に思ひたつて、「わいふ」の読者をふやしてみよう、と友人に声をかけたら、あつという間にこれだけ増えました——と十人近い新読者を紹介して下さいました投稿者がありました。本当に嬉しくて、足を向けては寝られない心境——と言ったら少し大げさすぎるのですが、いつまでたつても、手伝つて下さるかたに交通費ぐらいしか差しあげられない現状を、何とか脱却したい、頁数も内容も、何かもつと豊かなものにした

い、と痛切に思います。

どうか一人が一人をふやすお気持ちで、お友だちに声をかけてみて下さいませんか。皆さまのおかげで、部数は着実にふえてはいるのですが、もう一頑張りなのです。

おねがいばかりで、スママセン！

女の子の育て方

樋口恵子

「幼稚園でのシヨック」と筆者は書き出している。現在の子どもの男女差は、物心ついて以来の環境が作ったに違いないと信じていた筆者が、ある幼稚園をルポしたとき目にした、否定できない男女差――。

男の子は砂場で大規模なダムを作り、好奇心に目を輝かせて水道工事のオジさんの手もとをのぞきこむのに、女の子は大人しく砂場でおだんごをつくっている。

男女差は本当にあるのか、と疑い始めた筆者は、気がついた。四才児はすでに生まれた時から、男、女の差をつけて育てられていたのだ、と。この本の中には、私たちが日常無意識のうちに、男、女の差別をつけて子どもに接し

ているありがたが、みごとに洗い出されている。

泣いたとき、ケンカに負けて帰ってくるとき「男なんだから」と叱られる男の子。叱ってもなかなか泣かないと、「可愛氣がない」と言われる女の子。

涙への抵抗力一つとてみても男の子と女の子の育てられかたは、おどろくほど違っている。

家庭でも、社会でも、消極的に、受身の人間になるような枠をはめて女の子が育てられていく現実を、筆者はいみじくも「テン足」と呼ぶ。

女も、男も、ともに人間として、のびのび暮せる社会、対等なパートナーシップにたつて、楽しく暮せる社会は、女と男の、夫と妻のどのようなありかたが必要か、筆者の言いたいのはそこなのである。（文化出版局・八八〇円）

女性解放の政治学

ジョー・フリーマン

実に読みごたえがある。女性解放をテーマに、これほどズシリと手ごたえのある本は少ない。

著者のフリーマンは、六年間、女性解放運動に関わった経験をふまえて、アメリカのウーマン・リブの運動の起源、形態を客観的に分析し、さらにそれらの運動が、国家政策にいかに関与を及ぼしたかを的確に叙述している。

社会制度を改革することが女性解放への道と考えるニューレフトと、左翼男性への利益に追随することを拒絶するフェミニスト。

ニューレフトの男たちを含めて、つねに嘲笑とからかいの的でしかなかった初期の運動。しかしこうした中で、怒

りにめざめたより多くの女たちが、運動に参加していく。

組織の肥大に伴って、効果的に運動を進めることよりも、組織内の交流、平等、相互批判に費される大きな労力。男性ジャーナリズムの皮相さに失望して徹底的に男性記者をしめ出そうとする若い派の人々。無数の草の根グループとそのメディア。男性を愛すること自身、女性を裏切ることになるとして、同性愛を解放への戦いの一種とみなす、レズビアンの女たち。

まさに私たちに関わりのある状況がそのまま描かれていて、およそ、真剣に女性解放に関わっている人間なら、誰でもドキリとし、組織と個人運動とその方法について、改めてみつめ直さずにはいられない。恐ろしい本である。

（未来社・一八〇〇円）

わいふ情報コーナー

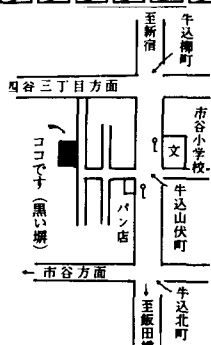
わいふバザーのおしらせ

▼不用品販売バザーを企画しています。中元、歳暮などでしたいただいた、不用の食料品、生活用品、何でもけっこうです。これを機会に押入れの整理をどうぞ！

▼ねだんは市価の半額位。各自品物にねだんと名前、品目をつけて下さい。申込は編集部へ三月十日までにどうぞ。

日時 三月二十二日(木) ところ 東京都新宿区加賀町二二三 田中

(問合せ二六九一三三八)



いっしょにやりませんか

ティーチン・その他の活動に参加したくてもできないでいる横浜市近郊の会員の方、支部のような形で集まり、何かできることをいっしょにやりませんか。昨年から二度ほど集まりをもち、二月から女性史の勉強を始める予定です。並行して、「わいふ」合評会や本部と同テーマでのティーチ・インなどできたら行っていき、自立と解放をめざす学習と交歓の場にしたいと話し合っております。現在は一時的に、横浜市港南区の井上宅(京急線上大岡下車バス十五分、根岸線洋光台下車バス十分)に集まっています。近郊の方、ぜひ左記へご連絡下さい。

河上〇四五(九五三)二六二三
井上〇四五(八四三)四七三二

女性学研究会へどうぞ！

今まで陽のあたらなかった女性史の視点を学問の分野まで高めよう、と研究するグループです。

分科会 海外女性学

二冊ですと割安です

「わいふ」は原則として購読者に直接郵送していますが、郵便料が高いので読者に申しわけなく頭痛のタネなのです。

予約購読料のうち実に四分の一以上が送料なのですから。ところがこの送料、まとめて二冊以上おとりになると、ぐっとわり安になりますので、ご近所のかたや、PTAやサ

売りました

布団乾燥機、定価二万四千円を、一万五千円で。まだ一

回しか使用していません。

杉山英子

中野区本町4-13-17

女性と生物学
女性と経済学

女性史

講座 月一回

問合せ〒596大阪府岸和田市
加守町2-15-8小出久子
(〇七二四一三八一三三五)

一冊などで時々お会いになるお友だちと、まとめて二冊以上おとりになってみたらいかがでしょうか。

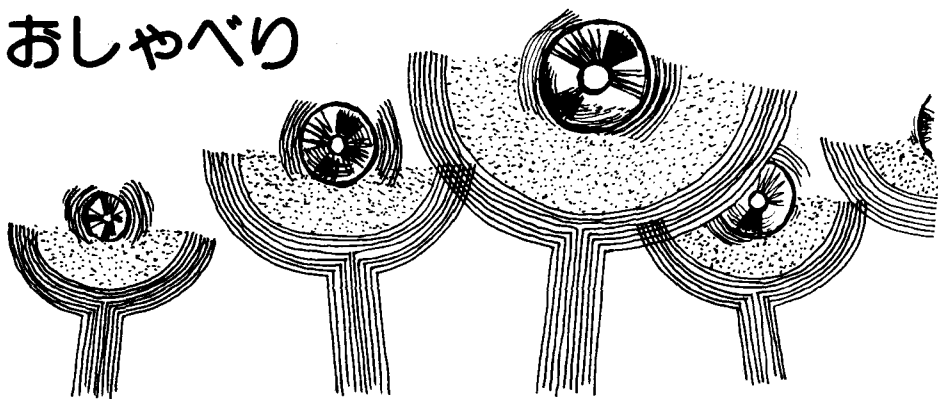
一冊一冊二冊二冊二冊
三冊一冊五冊一冊一冊
六冊一冊十冊二冊二冊
という内訳ですので、二冊ですと一冊分六〇円の送料になるわけです。

どうぞよろしく！

*

みなさんの声のひろばです。どんな声でもお寄せ下さい。

おしゃべり



今は、ただ……

武蔵村山市 S・M

三人の小さな子供に追いまくられ(三人目が少々病弱なため、通院に時間をとられ)、自分の時間を思うようにつくる事のできない不器用な私には、文字という文字、活字という活字を見ると、それは眠り薬となつて快い眠りをさそってくれるのです。

そんな私を、主人は軽いケイベツのmanaザシで見えていたようですが、どこから知ったのか、「わいふ」を勧めてくれたのです。最初は目をサラのようにして読みました。同じ主婦という立場でも考え方しだいで対立したような意見も見受けられました。私も一応、ない頭をしぼって考えました。私の場合はどうか!と。

でも結果は、まず目先の子供達のこと。とにかく、この子供達を幼稚園なり小学校に入れてから考えよう。今は、夜となく昼となく、子供都合で起こされてしまう私。

ない頭で、何となくは自分について考える事はあつても、それはすぐに子供達の声と睡氣に中断されて、忘れてしまう。今はとにかく、一人でホッとすわる時間と、ゆっくり眠れる時間がほしい。

変りました

市川市 柳本綸子

読みはじめてもう一年がたつたのですネー。読むたびに考えさせられることが多く、私自身の生活もガラリと変りました。二才児をかかえて何もできないとあきらめていましたが、「わいふ」、アンフアンテを経て、今無認可保育所でいろいろな体験をしています。そのうちに体験談をまとめて投稿したいと思っています。

共に歩みたい

大阪市 堀田恭子

皆様こんにちは。私は二十六才の主婦です。平凡で気ままな家庭生活が好きで、毎日同じ事のくり返しに甘んじています。主人とは、嫌いだけれど愛していると思つて、結婚しました。それでよくもめましたが……。二才半の男の子と八ヶ月になる赤ん坊を授かつて、平和(?!?)に暮しています。

閉ざされた家庭にいますと、時折、無性に淋しく不安になることがあります。「わいふ」を手にするようになりましたのは、好奇心もありますが、一人取り残される恐怖からでした。

早や二年になりますが、婦人公論の読書法と

同様で、いろんな女性の考え方や人生があるのを知って、ただ満足するだけでした。しかし、今、呼べば答えて下さる方がいらしたら、どんなにか心強く、豊かになれるだろうかと思えます。そして、その方々と共に考え、共に協力して歩みたいと思いました。どうか皆様、お友達になって下さいませね。

「母」

東京都 斉藤芳枝

昭和九年十二才で叔母の家に養女に行きました。小さい時から大好きな叔母だったのですが、「叔母さんの家の子になるか」と言われた時は、心の中で「イヤ」と思いましたが、口では「いいわ」と言っていました。叔母の家は、私を女学校に行かせるのがやっとという様子でしたが、私は一人っ子として大切にされたようです。実家には兄二人と私、妹一人の四人兄妹。気弱な私は兄妹からいつもバカにされ、いじめられていました。両親は子供自慢で、兄や妹の自慢ばかりしていました。そして謙遜する時は私を持ち出していました。そんな私をいつも庇ってくれるのが叔母でした。

その叔母の家に養女に行つて、ずっと心に秘めていた思いがあります。それは、「私が大人になって子供ができたら、どんなことがあつて

も、絶対に、絶対に子供をはなすまい」という固い決心でした。でも口に出したことはありません。

クラスで一割位しか行かない女学校に行き、特別につらいこともなく育ったのですが、五十路を過ぎた今でもなお「母（実母）」という言葉にコンプレックスを覚えます。「私は本当の母（実母）の愛情を知らないんだ」という思いが心のすみにあります。この気持ちが無かったら、そして子育てでの設備が良かったら、母親は三才まででもよいとも思います。

私の母親コンプレックスは、現在深い仏法哲理を学び、生命を尊ぶことによつて無くなりました。

155号で言いたりなかったこと

東京都 野村瑞枝

子供が母親を必要とする時期に、それでは母親は家で子供のそばにいないければならないか、ということですが、子供のそばにべったりいなければ子供の心がつかめなとは思いません。むしろべったりくっついていっていると意外に大切な部分を見逃してしまうような気がするのです。

子供との接触は時間的長さではなく、質的濃さだと思います。なお、子供の手本になるということは、立派な人間にならねばならないか、と

いう点ですが、ありのままの人間性をさらけ出していいのではないかと思います。ただ、立派とまではいかないまでも、向上しようという意欲のある人間にはなりたいと思うし、それが母親としての最低の義務だと思うのです。

子供の心情を第一に

市川市 鞍智美知子

昨年十月三十日の集まりに出席しなくてごめんなさい。「母親はどこまで必要か」私も、言いたい事、聞きたい事がたくさんありました。私には五年生と六年生の男の子がいます。十月三十日に出かけたいと思い、子供に鍵を持たせて登校させようとしたら、「ママが居ない家に帰ってくるの大きい。暗い感じがするんだもん。」二人、口を揃えて言うのです。

子供にそんな思いをさせて「母親はどこまで必要か」を語り合う必要は、私には無いと思いました。少なくとも私の子供に、私はまだまだ必要なのです。私は鍵を引出しにしまいこみました。寂しい思いを一刻でもさせるのはよそうと思つているこの頃です。十月十二日に姑が急逝し、葬儀の前後、親不在の時間を過した彼らに、また、自らの不在の時間を与えることはできませんでした。

自分がすすんで作つた家庭、自分が産んだ子

供だから、私は自分の見識で育てたいと思っているのです。後向き、前向きなどという流行に捉われず、子供の心情を第一に、大切にしたいと思っています。

私たちの作る雑誌

松戸市 白水光子

柏市での「わいふ」の集会に参加して、いろいろ刺激されました。学校を卒業して、十年近くになると、何事にもルーズになってしまうのかと、自分のことが省みられました。「わいふ」の成り立ちの話を聞くことができて良かったと思いました。購読者の大半の方はご存知ないことでしょうか、折あそば誕生のいきさつなど書かれてもよいのではないかと思います。それにより、自分達で作り上げていく雑誌であることが明確にされるように思いました。また、顔を合わせることで、投稿の苦手な（私もその一人ですが）方たちの貴重な意見を拝聴する機会もできますので、各地域で小さな集まりが多くできたら素晴らしいと思います。一口にわいふ購読者と言いましても、迷い悩める主婦、その段階をいくらか卒業しつつある主婦、実践段階に入っている主婦、あるいは人生の大半を過ごし反省しつつ未来を考える方など様々だと思います。なるべく多くの方々の本音を伺って

みたいと思います。先日、若い方の考え方を知りたいとおっしゃる方がいらつしやいましたが、逆に私などは、お年を召した方達の本音も伺ってみたいと思いました。主婦として女として人間としての立場から、「嫁と姑」などという関係について意見交換があっても良いのではと思ってみたりしています。

誌上での軽い読み物として「間違電話」のあれこれとか、「失敗談」のコーナーなどはいかがでしょうか。不特定多数が相手の電話のベルが作り出す話というのも面白いのではないかと思います。また、失敗談にしても、日常のスキマに案外問題があつたりするのではないかと思っています。そうした事を軽い感じで取り上げてみるのも一案ではないでしょうか。

片付魔廃業

千葉市 田原由美子

私はもともと掃除、洗濯など片付事が好きな方である。学生の頃など、夜中にこそぞ起き出して、引き出しの整理をしたものだ。現在、一才二ヶ月の男の子がいる。ちらかすことにかけては、私の百倍位うまいので、このごろは彼のパワーにお手上げである。先日、柏市での会員の集いに出席した。誌上で活躍していらつしやる、グウタラママ、ネボスケママ（失礼）に

お会いして、憧れてしまった。誰も要求していないのになぜ洗濯を朝するのか、次に使う時までに間にあえばいいのだという意見になるほどと思う。すかつと晴れた日は、まず洗濯をと思つてしまふのだが、一日分の食器を流しに山積して私はニヤリとする。いいぞ、この調子だ。自分でしばりつけている日常のリズムを崩すことは勇気がいるが、どつきりまとめて片づけるのもなかなか痛快だと知った。やらなければいけないものという認識を背中にしよいこんでいるので、肩がこるのだ。やると楽しいものだという風に思えば、少々ためても平気でいられる。家事に有能な主婦になろうなどというエエカッコシイとはさよならしたいと思っている。そこらじゅうゴミだらけの中で、ニコニコ笑っていられたらいい。一番喜ぶのは、わがむすこかも知れない。

「子供を預ける法」を

東京都 友松悦子

わいふ一五五号おもしろく読ませていただきました。中でもわいふ家庭科「物を捨てない法」は大いに参考になりました。ついては、お願いを兼ねて提案なのですが、この「わいふ家庭科」の記事に、子供を一時預ける法について特集していただけないでしょうか。今、私の（私達効

児をかかえる女の)それが一番の問題です。私自身、四、五種類の方法を試みたことがありますが、それぞれに多少の問題があり、相変らず切実な問題なのです。

伊丹市の

南部百合子様へ

小金井市 矢内花箒

トレースの通信教育に関する情報をということでしたので、私のささやかな経験をお話いたします。資料は別便にてお宅へお送りいたしましたので、大かたのことはおわかりになりましたことと思いますが、まず、新聞広告の中から自宅に近い方のM設計をえらんで説明書の郵送を求めました。所定分の切手を入れて送りましたら、教育課程の説明などと一緒に一枚の簡単な設計図とトレース用紙が同封されてきました。墨でトレースして返送すれば指導してくれるということ、私もまあ多少の経験がありましたから、気軽に烏口で線を引き送りました。数日後返ってきた私の図面はいたるところ朱筆だらけ、こと細かに注意書きがされてありました。それでも「かなり素質はあるようですから一生懸命やれば立派にできるようになるでしょう」とあったのを支えにして勉強を始める決心をし、一万円の入会金を払込んで(四十六年当時)女

子製図科の受講者証と、第一教程の教科書、手本、トレース用紙等を受取りました。教科書は第一教程に関するところをよく読んで解答を送り採点してもらおうので、だいたいやさしいものでしたが、トレースの練習はやはり大へんでした。鉛筆を使うので線巾はすぐ太くなるし力不足で薄くなったりします。今まで素人仕事で適当に書いていた甘さを思い知らされました。それでも何とか第一教程は合格、第二教程(曲線)に入ったところで私は仕事が忙しくなり、とうとう続かなくなつてしまいました。続いていたら夏にはスクーリング等もありますし、励みになることもあったと思いますが、ただ私の場合はその後仕事の内容がだんだんに変つて機械図面のトレースとは縁がなくなつてしまいましたから、一万円損をしたような気がします。やはり勉強を始めるにはかなりの見通しをつけて、始めたからには強い意志が必要だと思ひます。こんなお話でお役にたてば幸いです。

わいふ小学校

栃木市 古沢涼子

わいふ数冊を拾い読みしてびつくりしました。何ていじわるなことを言う人がいるんでしょう。何と立派な文章をお書きになる方々が揃つているんでしょう。エリートでもスーパーウーマン

でもない普通の主婦たちの本音、と聞いて飛びついたのですが、予想とはちよつとちがった誌面でした。

でも、よく搜したらやっぱりいました。目立つ方々の陰でのんびりおしゃべりしている仲間も。懐しく思い起こしました、二十年前小学校に入学した時のとまどい。世の中にはいろんな人がいたのでした。何しろトイレの戸をたたけなくて幼稚園を中退した私ですから、学校に入つてからも授業中大きな声で教科書を読めるようになるまで、何年もかかりましたつけ。

社会に出た今では、どんなジャリにも席はあると知っていますので、小石でも重石のような大きな顔をして転がっています。通信制のわいふ人生小学校に入り直したつもりで、コワイ顔に迫られないのを幸い、ゆつたりと様々な意見を伺わせていただきます。新しい楽しみのタネが見つかるかも知れませんもの。



おねがい

▼これまで、あるいは現在、パートまたはアルバイトで働いた経験のあるかた。

あなたが受けた収入を、何にお使いになったか、教えていただけませんか。

六月末発行の一五八号で、主婦のパート労働をテーマとして取りあげてみたいのです。

ハガキ一枚でけっこうです。次の事項についてお答え下さい。

- ①あなたの働いた仕事の内容
- ②期間の長さ
- ③収入
- ④その収入を何に使ったか
- ⑤おつれあいの年間収入
- ⑥おつれあいの職業
- ⑦あなたの年齢（当時の）

※無記名でもけっこうです。

主婦のパートは働く女性の賃金を引き下げる働きをするものとして、あるいは女性のライフサイクルの悪循環の一因をなすものとして、女性解放運動の中ではとかく白

い目でみられがちです。しかし一方では、ますます多くの主婦が、ますます多く働きたい状況にあることも否定できません。公式的にパートを否定するだけでは問題は解決しないように思われてならないのです。

一五八号でぜひこの問題を考えてみたいので、どうかアンケートにご協力下さい。またできるだけ多くのデータを集めたいので、お知りあいのかたに、パートで働いていらっしゃる方がありましたら、ぜひ声をかけて下さい。

どうぞよろしく願います。

締切は四月十五日です。

編集だより

▼「子育て期の主婦の生活」、皆さまのおかげで、大変充実した調査がまとまりました。

面倒なアンケートに長い期間にわたって協力して下さった方々に、心からお礼申し上げます。アンケートの分析をして下さった千葉県の鈴木由美子さんも、お子さんがハシカで熱を出している最中に、原稿をまと

めて下さり、編集部一同心から感謝しています。

▼今回のテーマは、「女のあそび、男のあそび」にきまりました。

あなたは生活の中で、どんなあそびを持っていらっしゃるか？ マージャン、旅行、ゴルフ——あそびというとそんなものばかりがチラつきますが、「わいふ」に投稿するのも本を読むのも、絵を見に行くのもあそびかもしれません。江戸時代の庶民の人々は、いずれも生活をエンジョイし、老いも若きも、よく遊んだように思われます。

現代の主婦にとって遊びとは何なのでしょう。みなさんの生活の中にある遊びをぜひ、知らせて下さい。それだけでなく、女の目からみた男の遊びについて、書いて下さってもけっこうです。おつれあいからのご投稿も、歓迎いたします。締切三月二十日。

▼第一回現代葬式考いかがですか？ 前号でもおねがいました。が、「新冠婚葬祭入門」のよい例を知っていらっしゃるかた、どうかぜひ一報下さい。

フリーマン／奥田暁子・鈴木みどり訳

女性解放の政治学

アメリカ女性解放運動がいかに国の政策に影響を及ぼし女性の地位向上に役立つ法の制定を齎したかを現在起りつつある社会運動にそくして分析。

B 6判並製カバー・二四八頁・一八〇〇円

〔既刊〕関連書から

国立市公民館市民大学セミナーの記録

主婦とおんな

B 6判・八五〇円

伊藤雅子著

子どもからの自立

B 6判一〇〇〇円

伊藤雅子著

女の現在——育児から老後へ

B 6判一二〇〇円

伊藤雅子著

いどばた考現学

B 6判一二〇〇円

丸岡秀子著

めぐり合い百集

B 6判一五〇〇円

もろさわようこ著

おんなの歴史(上・下)

B 6判各八五〇円

もろさわようこ著

おんなの戦後史

B 6判一二〇〇円

東京都文京区小石川三の七
電話03・814・5521
振替(東京)七一八七三八五

未来社

米文化出版局のユニークな教育書!

女の子の育て方

愛と自立への
出発

樋口恵子著

■八〇〇円
■絶賛発売中

男女差別の教育は誕生のときから始まっていた。父親の役割、遊びの常識、涙の甘え、叱り方・ほめ方、ことは遣いなど、幼児期からの男女両性のあり方、生き方を導く新鮮な女性論。



好評既刊

よつば新書
親の出る幕 自信のある親になるために

樋口恵子著
600円

よつば新書

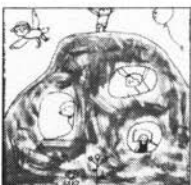
親ばなれ子ばなれ

吉岡たすくの
家庭教育論

吉岡たすく著

■六〇〇円
■絶賛発売中

しつけに熱心なお母さんほど、子どもの自立をじやましていることが多い。そんなことないわ、というお母さん、さあ吉岡先生と一緒にあなたのやり方をチェックしてみませんか。



文化出版局

〒一五一 東京都渋谷区代々木三一二一
TEL03(三三七九)二二〇二

.....
あなたも新しいコミュニケーションに参加しよう
.....

¥200

月刊交換情報

首都圏有名書店で 好評発売中



私鉄 京浜急行
地下鉄 東西線
銀座線
各駅売店にあり

- ★ 売ります
- ★ 買います
- ★ あげます
- ★ サークルのご案内

情報をどしどしお寄せください。

★「交換情報」誌の全スペースは無料で解放されています（PRは除く）。あなたのメッセージをお寄せ下さい。大きな河の流れも源流をたどれば、せせらぎの集積なのですね。



まだ使用できる日用品が眠っていませんか？
「交換情報」は眠っている不用品を、生き生きとよみがえらせます！ さあ思い切って。

▶ 不用品情報は

☎〔03〕437-9651～3

（月～金曜9～17時、土曜9～12時受付中）